

# 備中國府跡

## 緊急確認調査

1989年3月

總社市教育委員会

# 序

総社市は気候風土に恵まれた、自然豊かな都市であります。本市には、これらの満たされた条件の中、花開いた古代吉備を知る手掛かりになる文化財が多数残されています。特に埋蔵文化財については、全国第9位の作山古墳に代表されるように、全国屈指の密集地帯といえます。文化財という先人の残した遺産を、後世により多く伝えてゆくことが現在を生きる私たちの責務と考え、文化財の保護と開発には特に慎重に対処しております。

さて、備中國府は各国に設置された古代の役所の一つであり、政治、交易などの集約する重要な性格をもつ地方都市であります。遺跡の持つ性格を考えると発掘調査を実施して、その実態を明らかにし、積極的に保護することが重要と考えられます。

調査は、3カ年計画で開始し、本年で予定を終了することになり、調査報告書を刊行するはこびになりました。この報告書が備中國府跡解明の一助になれば幸いです。

調査にあたりましては、御指導を頂いております指導員の諸先生方、文化庁、岡山県教育委員会、奈良国立文化財研究所をはじめとする研究機関や研究者の方々、地権者をはじめとする地元関係者並びに作業員の方々に厚く御礼申しあげます。

平成元年三月

総社市教育委員会  
教育長 浅沼 力

## 例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が昭和60・61・63年度（1次～3次）に国庫補助を受けて実施した「備中國府跡緊急確認調査」の報告である。
2. 発掘調査は、文化係職員村上幸雄、谷山雅彦、高田明人が担当した。
3. 出土遺物の整理は、社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告の執筆は、第1・2章・第3章 第4節 村上幸雄、第3章 第1節、第3節（T-23～32）谷山雅彦、第3章 第2・3節高田明人が行い、編集は高田明人が行った。  
遺物写真の撮影は高田が行った。
5. 遺物整理、報告書作成にあたっては、西平登代子（社会教育課服部収蔵庫）の協力を得た。
6. この報告書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は磁北である。
7. 第3図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を複製したものであり、その他は、総社市発行のものを複製したものである。
8. この報告書に関する実測図・写真・遺物等は、服部収蔵庫で保管している。
9. 遺構については、以下の記号を用いた。SB（建物跡）、SD（溝跡）、SI（住居跡）、SE（井戸）、SK（土塙）、SX（不明遺構）
10. 遺物の縮尺は、すべて4分の1に統一した。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

第1章 調査にいたる経過と調査計画	1
-------------------	---

第1節 調査にいたる経過	1
--------------	---

第2節 調査計画	2
----------	---

第2章 歴史的環境と研究小史	3
----------------	---

第1節 歴史的環境	3
-----------	---

第2節 研究小史	5
----------	---

第3章 調査の概要	9
-----------	---

第1節 1次調査の概要	9
-------------	---

第2節 2次調査の概要	30
-------------	----

第3節 3次調査の概要	48
-------------	----

第4節 むすびにかえて	66
-------------	----

## 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
-----------	---

第2図 伝備中國府出土瓦	1
--------------	---

第3図 備中國府跡比定地 ( $S = 1 / 50,000$ )	4
-----------------------------------	---

第4図 備中國府跡比定地周辺の小字 ( $S = 1 / 10,000$ )	6
--	---

第5図 備中國府跡1次調査位置図 ( $S = 1 / 5,000$ )	10
--------------------------------------	----

第6図 北國府地区トレンチ位置図 ( $S = 1 / 4,000$ )	11
--------------------------------------	----

第7図 T-1 平面図 ( $S = 1 / 60$ )	12
------------------------------	----

第8図 T-2・3 断面図 ( $S = 1 / 60$ )	12
--------------------------------	----

第9図 T-2 出土遺物	12
--------------	----

第10図	T-4 平面図 (S = 1/80)	13
第11図	T-4 出土遺物	13
第12図	T-4 断面図 (S = 1/60)	13
第13図	T-5 断面図 (S = 1/60)	14
第14図	T-8~10出土遺物	14
第15図	T-8~10断面図 (S = 1/60)	14
第16図	T-7・11・14・15断面図 (S = 1/60)	15
第17図	T-7・11・14出土遺物	15
第18図	T-12平面図 (S = 1/80)	16
第19図	T-12断面図 (S = 1/40)	17
第20図	T-12出土遺物	17
第21図	T-18・19出土遺物	17
第22図	T-21~23平面図 (S = 1/120)	18
第23図	T-23溝断面図 (S = 1/60)	18
第24図	T-22・23出土遺物	19
第25図	T-25断面図 (S = 1/60)	19
第26図	T-26・30溝平面図 (S = 1/600)	20
第27図	T-26出土遺物	20
第28図	T-26溝断面図 (S = 1/60)	20
第29図	T-31断面図 (S = 1/60)	21
第30図	T-31出土遺物	21
第31図	T-35~42出土遺物	22
第32図	T-42断面図 (S = 1/60)	22
第33図	御所地区トレンチ位置図 (S = 1/4,000)	23
第34図	T-45平・断面図 (S = 1/80)	24
第35図	T-45出土遺物	24
第36図	T-44出土遺物	24
第37図	T-44出土遺物	25
第38図	T-44平・断面図 (S = 1/80)	25
第39図	T-46断面図 (S = 1/60)	26
第40図	T-46出土遺物	26
第41図	北国府地区中世館跡及び微高地の広がり (S = 1/3,000)	28

第42図	備中國府跡 2次調査地位置図 (S = 1 / 15,000)	29
第43図	T - 1 ~ 5 位置図 (S = 1 / 5,000)	30
第44図	T - 2 断面図 (S = 1 / 80)	30
第45図	T - 2 出土遺物	31
第46図	T - 6 ~ 80位置図 (S = 1 / 5,000)	32
第47図	T - 6 断面図 (S = 1 / 60)	33
第48図	T - 7・9 出土遺物	33
第49図	T - 10 断面図 (S = 1 / 60)	33
第50図	T - 15 断面図 (S = 1 / 60)	33
第51図	T - 22 断面図 (S = 1 / 80)	34
第52図	T - 26 断面図 (S = 1 / 60)	34
第53図	T - 31 断面図 (S = 1 / 80)	34
第54図	T - 40・43・42断面図 (S = 1 / 80)	35
第55図	T - 37・40・41出土遺物	35
第56図	T - 50 断面図 (S = 1 / 80)	35
第57図	T - 52 断面図 (S = 1 / 80)	36
第58図	T - 54 断面図 (S = 1 / 60)	36
第59図	T - 59・62出土遺物	36
第60図	T - 73 断面図 (S = 1 / 60)	37
第61図	T - 67~69・74~77・79・80出土遺物	37
第62図	T - 81・82位置図 (S = 1 / 5,000)	38
第63図	T - 82 断面図 (S = 1 / 80)	38
第64図	T - 83~89位置図 (S = 1 / 5,000)	38
第65図	T - 83~85造構配置図 (S = 1 / 150) と T - 83断面図 (S = 1 / 80)	39
第66図	T - 83 SK - 003平・断面図 (S = 1 / 40)	40
第67図	T - 83 SK - 003出土遺物	40
第68図	T - 83~85出土遺物	41
第69図	T - 89 断面図 (S = 1 / 60)	41
第70図	T - 89出土遺物	41
第71図	T - 90~120位置図 (S = 1 / 5,000)	42
第72図	T - 90 (上)・93断面図 (S = 1 / 80)	43
第73図	T - 96出土遺物	43

第74図	T-99断面図 (S = 1/80)	43
第75図	T-104断面図 (S = 1/60)	43
第76図	T-107断面図 (S = 1/80)	44
第77図	T-110断面図 (S = 1/80)	44
第78図	T-111断面図 (S = 1/80)	44
第79図	T-114断面図 (S = 1/80)	45
第80図	T-117出土遺物	45
第81図	T-118断面図 (S = 1/80)	45
第82図	T-118~120遺構配置図 (S = 1/150)	46
第83図	T-118・120 SD-010出土遺物	46
第84図	SD-011, SK-004出土遺物	47
第85図	備中國府跡発掘調査地位置図 (S = 1/15,000)	49
第86図	備中國府跡3次調査地トレンチ位置図 (S = 1/4,000)	50
第87図	T-3断面図 (S = 1/80)	51
第88図	T-3出土遺物	52
第89図	T-4断面図 (S = 1/80)	52
第90図	T-4・5出土遺物	52
第91図	T-8・9出土遺物	53
第92図	T-9断面図 (S = 1/80)	53
第93図	T-11遺構配置図 (S = 1/100)	53
第94図	T-11断面図 (S = 1/80)	54
第95図	T-11 SK-005平・断面図 (S = 1/40)	54
第96図	T-11・12出土遺物	54
第97図	T-15~22位置図 (S = 1/500)	55
第98図	T-15出土遺物	55
第99図	T-19出土遺物	55
第100図	T-15断面図 (S = 1/80)	56
第101図	T-20断面図 (S = 1/80)	56
第102図	T-21断面図 (S = 1/80)	56
第103図	T-22断面図 (S = 1/80)	56
第104図	T-16 SD-013平・断面図 (S = 1/80)	56
第105図	T-16断面図 (S = 1/80)	57

第106図	T-18断面図 (S = 1/80)	57
第107図	T-19断面図 (S = 1/80)	57
第108図	T-23平・断面図 (S = 1/80)	58
第109図	T-23遺構断面図 (S = 1/40)	58
第110図	T-23出土遺物	59
第111図	T-24平・断面図 (S = 1/80)	59
第112図	T-24出土遺物	59
第113図	T-25平・断面図 (S = 1/80)	60
第114図	T-25出土遺物	60
第115図	T-26・27断面図 (S = 1/80)	61
第116図	T-26・27出土遺物	61
第117図	T-28・29・30平・断面図 (S = 1/80)	62
第118図	T-28・29・30出土遺物	63
第119図	T-32断面図 (S = 1/80)	63
第120図	T-31平・断面図 (S = 1/80)	64
第121図	T-31・32出土遺物	64
第122図	推定域内の地形想定図 (S = 1/15,000)	65

### 表 目 次

表1	遺物観察表	69
----	-------	----

### 図 版 目 次

図版1	備中国府跡比定地周辺航空写真	77
図版2	1. 推定域遠景 (北国府地区・東から)      2. 伝備中国府跡近景	78
図版3	1. 1次調査T-15土層断面      2. 1次調査T-12遺構掘り上がり状況	79
図版4	1. 1次調査T-26及び蔽土手      2. 1次調査T-26溝断面	80
図版5	1. 1次調査T-23溝断面      2. SK-002遺物出土状況	81
図版6	1. 1次調査T-25土層断面      2. 1次調査T-45遺物掘り上がり状況	82
図版7	1. 2次調査T-83~85遺構掘り上がり状況      2. SK-003遺物出土状況	83
図版8	1. SD-010・011 (東から)      2. SD-010・011 (西から)	84

図版9	1. SD-010遺物出土状況	2. SD-011土層断面	85
図版10	2次調査出土遺物		86
図版11	1. 3次調査SK-005掘り上がり状況	2. SD-013掘り上がり状況	87
図版12	1. 3次調査T-28・29遺構検出状況	2. 3次調査T-30遺構検出状況	88

# 第1章 調査にいたる経過と調査計画

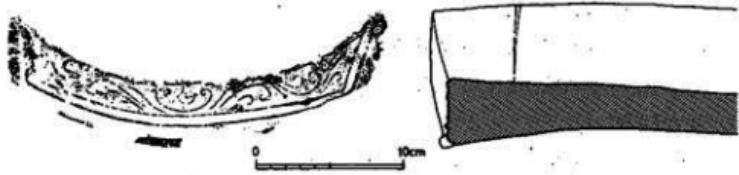
## 第1節 調査にいたる経過

弥生時代後期に、特殊器台形土器・特殊壺形土器に表微される文化圏を形成した吉備社会は、優性な経済的背景と政治的結束をもとに、5世紀代には大王陵に匹敵する造山、作山の兩巨大墳を築造しうるほどの高揚をみた。しかし畿内との対立・抗争に敗れ、抑圧の中で昔日の面影を失い、中央政権による再編を甘受せざるをえない状況に追いつまれた。律令制下にあって、吉備は、備前・備中・備後の三国に分割され、さらに和銅6年(713)には備前六郡を割いて美作国が創設され、各國に国府が置かれた。



第1図 遺跡の位置

さて備中国府は、10世紀に編纂された『倭名類聚抄』によると、「備中国府在賀夜郡」と記されている。この賀夜郡は、高梁川以東の現在の総社市と上房郡賀陽町及び岡山市足守・高松を含む地域であり、国府が各國の中核地におかれたりを勘案すれば、総社平野内の一画に所在したであろうことは疑いない。にもかかわらず、総社平野においては、今まで国府の存在を裏付けるような考古学的事例は殆どといって良いほど見当らない。わずかに邑久町教育委員会所蔵品の中に、備中國府出土と伝えられる瓦一点が存するのみである。しかしその出土地点、経緯については不明であり、直ちに首肯するに



第2図 伝備中國府出土瓦

は躊躇せざるを得ない。このため備中国府跡については、これまで主として地名等を論拠にして多くの先学諸氏による比定が行われ、総社平野の中央部、現在の総社市金井戸一帯が最有力地と考えられるに至った。この地はその南端近くを国道180号線が西走しており、岡山・倉敷両市の後背地として近年は宅地化が著しく変貌の激しい地域である。

このため総社市教育委員会では、早急に備中國府跡の所在地を確認し、保護する必要性を痛感し、昭和60年度より3カ年にわたり緊急確認調査を実施することになった。

## 第2節 調査計画

### 調査の体制

調査は、昭和60～62年度の3カ年間にわたり、国庫補助事業として総社市教育委員会が、文化庁、岡山県教育委員会、備中國府跡緊急確認調査指導員の指導助言のもとに実施することになった。しかし昭和62年度は、他事業との競合のため不可能となり、63年度に延期して実施した。

調査にあたっては、上記機関のほか多くの研究機関、研究者の方々から有益な指導助言を受けた。また地権者の方々には、調査目的を理解していただき快諾を得た。併せて深甚の謝意を表します。

年 度	調査面積	経 費	調 査 期 間	備 考
60	1,585m <sup>2</sup>	400万円	60. 11. 11～61. 1. 17	推定国府域を中心に、方九町の現況 航空測量図作成 (S = 1/1,000)
61	1,527m <sup>2</sup>	260万円	61. 11. 25～62. 2. 7	調査地を推定域外周辺に拡大
62			中 止	
63	875m <sup>2</sup>	200万円	63. 11. 14～64. 1. 9	(報告書を除く)

### 調査組織

#### 備中國府跡緊急確認調査指導員

鎌木 義昌（岡山理科大学教授）

近藤 義郎（岡山大学教授）

田中 琢（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）

葛原 克人（岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長）

#### 岡山県教育委員会

河本 清（岡山県古代吉備文化財センター調査第一課長）

正岡 陸夫（文化課埋蔵文化財係長） 60. 4. 1～62. 3. 31

伊藤 晃（文化課課長補佐） 62. 4. 1～

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

教育次長 茅野 健二 ～62. 3. 31

秋山 畏 62. 4. 1～

社会教育課 長 橋口 文男

主 幹 村上 幸雄（調査）

主 任 森田 忠志（庶務）63. 4. 1～

主 事 小田 求（庶務）～62. 3. 31

“ 三宅 正吉（ “ ）62. 4. 1～

“ 谷山 雅彦（調査）

“ 高田 明人（ “ ）

主事補 前角 和夫（ “ ）62. 6. 15～

作業員

安藤 恒雄 大崎 武士 萩原 俊一 萩原 朋一 国府 謙二

国府 橋二 国府 茂男 国府傳十郎 国府 元雄 中島 耕一

難波 吾一 難波 賢二 福武 秀樹 牧野 哲

毛利 健一 山本 竹志 横田 武夫 渡辺 保夫 大月 栄

倉森 佳子 国府英美子 国府 一枝 国府 久代 国府 緑子

国府 順江 鳥越 幸子 難波千鶴子 松本 和子 横田 勝子

## 第2章 歴史的環境と研究小史

### 第1節 歴史的環境

高梁川に育まれた総社市は、のどかな田園風景を残す県南の内陸小都市である。かつての吉備の中核部に位置するこの地域は、質量ともにすぐれた遺跡があり、古代の役所国府も、この総社平野内に存することは、この地域の地理的歴史的環境をみても疑いないであろう。

高梁川は中国山地に発して、吉備高原を縫って南進し、やがて瀬戸内海に注ぐ全長110kmの県下三大河川の一つである。上流域で小支流を合つつ小盆地を生み、吉備高原の南端にいたっ



第3図 備中國府跡比定地 ( $S = 1 / 50,000$ ) 実線は主要旧河道

て幾条もの分流となり、その堆積作用によってここに総社平野と呼ばれる広大な沖積地を造出した。平野南縁には、200~300m級の主峰列が東西に並立し、その分水界からは南北に狭小な尾根が幾条ものびる。土壤豊かな平野内は、すぐれた可耕地として稻作の採用以降、先人たちの生産、居住の場として幾多の遺跡を生みだしていった。特に弥生時代後半から末期にかけて、特殊器台形・壺形土器に象徴される独自の社会=吉備の中核を占めるほどの高まりを見せた。5世紀代には、その勢威は最高潮に達し、造山・作山の両巨大墳を生み出したが、畿内勢力の強い抑圧を受け、備中こうもり塚古墳を最後に吉備社会は解体を余儀なくされた。中央集権国家としての律令体制のもと、吉備は備前、備中、備後に分割されたが、総社平野を含むこの地は備中国として再編された。しかし律令体制下にあっても、国分寺・尼寺の造立や山陽道が位置する環境は依然としてこの地が備中国における要衝であったことに外ならない。従って律令国家の地方政府の中核たる国府が、ここに置かれたことも当然の帰結であろう。

さて賀夜郡に置かれたとされる備中國府を比定するにあたっては、まず賀夜郡の郡境を何処に求めるかが重要となろう。西は高梁川が下道郡との郡境であろうし、東は足守川左岸域で備前との国境となり、北は吉備高原域となるから、問題は南境である。高梁川は、市内「井尻野」付近で分岐し、「井手」「延」「清水」を通り、三須の低丘陵の以北に沿って蛇行しながら東流し、やがて足守川と合流して、備中高松の山裾を貫流しつつ「宮内」の方へまわりこみ、一路南流して「吉備の津」へ注ぐ。この河道こそ、葛原克人が提唱してやまない賀夜郡と產屋郡を分つ「郡境の河道」である。とすれば、備中國府が総社平野内の、しかも足守川以西の総社市域に所在したであろうことは疑う余地がないように考えられる。しかし今日にいたるまで、その所在は知れない。

## 第2節 研究小史

律令制下の備中國は、岡山県西~北西部を貫流する高梁川流域一帯を含む地域である。管下に都宇、產屋、浅口、小田、後月、下道、賀夜、英賀、哲多の九郡をもち、『延喜式』によると上京に九日、下国に五日の行程が定められた中国である。田積一万余町をもち、國の四等級では上國に位置づけられている。その南部一帯はかつての吉備中枢部を含む地域であり造山・作山古墳をはじめとする多くの遺跡が所在する。

『和名抄』に「在賀夜郡」と記された備中國府は、今日にいたるまで杳としてその所在が知れない。具体的な裏付けとなる考古学的資料は殆どなく、研究史をみてもその比定は地名を中心とした歴史地理学的方法に依らざるを得ない状況であった。以下にその概要についてふれよう。



第4図 備中國府跡比定地周辺の小字 ( $S = 1/10,000$ )

永仁6年（1298）の「備中国賀夜郡服部郷図」は、総社平野の東半にある長良山独立小丘陵の周辺部の所有関係を記したもので、古郡郷一丁六条の地内は空白になっており、その部分に該当する「御所」の小字名の存在から、のちに先学により有力比定地となつたところである。なおこの郷図には「国領」などの記載はあるものの、国府の存在をうかがわせるものは他に何の記載もない。

この郷図からのち近世末～近代にいたるまで国府をうかがわせる資料はない。

著者および著作年代も不明だが、幕末の編纂と考えられている『備中誌』<sup>11</sup> 賀陽郡卷之十三によると、八田部郷金井戸村の項では、「北国府苦しの屋敷跡とて少しの岳三反計りも有へし藪なども有また内堀なという字の田有古しへ國府の居賜ひし時の遺跡なるへし里人其地を呼て御所の内と云又溝手村に國府殿田と云名の田残れり」とある。比定地は、現在の総社市金井戸字北国府にあたる地で、30数軒の民家がすべて国府姓を名乗る小集落がみられる。集落背後の旧河道は、今もその名残りを留めており、藪土手と称する長さ80mほどの土手が残り、若宮様を祀る。この土手の南には、内堀、外堀、御所の内という地名も残っているとのことである。

幕末～明治初期に総社宮洞官であった堀安道により著された『総社記』<sup>12</sup>によると、備中國府は前後三転したとされている。第一 都産郡三須村国府屋敷と称する地。第二 総社町大字井手字清水国府屋敷土居と称する辺。第三 服部村大字金井戸御所と称する辺。地名のはかは具体的な論拠は示されていないものの、比定はのちに多くの研究者に引繼がれることとなった。

『岡山県通史』、『岡山県金石史』、『岡山県農地史』、『吉備郡史』などを著わし、岡山の歴史学研究に大きく寄与した永山卯三郎は、昭和3年に備中國府の位置について、条里研究の結果知り得たものとして「備中國府ノ位置ハ吉備郡服部村大字金井戸附近御所ノ内ヲ中心トシテ、東国府、才国府、南国府、北国府、一帯ノ地ナリ」とし、ついで『総社記』の国府三転説を紹介したのち、国衙址は「服部村大字金井戸字御所ノ辺、方三町許ノ地ニシテ南面シ東西ニ通スル直道ニ沿ヒ東西北ノ三面、幅約三十間許ノ外邊址ヲ織ラセリ」としている。服部郷図に示された地区的条里と金井戸地区の条里の基線は、中間に旧河道を含むため異っており、両者を同一のものとして捉えることはできず、また外邊址とする凹地も旧河道であることは否定できない。しかし現在のような精密な航空測量図のない時期としては無理からぬことであろう。ともあれ、ここに府域、国衙域についての具体的な比定が初めて行われたわけであり、備中國府跡比定地の基本的な考えが示されたもので、以後の研究に大きな指針となつたことはいうまでもない。永山は後年にも同じような考え方を述べている。

藤井駿は、明治19年作成の「備中賀陽郡金井戸村土地切絵図」にある金井戸村の北国府、北国府前、池ノ本、天神前、御所、南国府西、南国府東、西鴻崎、東鴻崎の地名や正保3年（1646）の「備中加陽郡図」の北国府村、南国府の存在から、「江戸時代の金井戸村の全体がほぼ王朝時

代の備中の国府の境域ではなかったかと推定」し、御所とよばれる地こそ備中国衛の存在していた土地で、御所の一部分に今も記されている御所神社、ヘラトリ神社、毘沙門天王の三小祀は、国衛の存在した時代、国衛の守護神として祀られたもの」であろうとしている。そして、これらの理由から「現在の総社市金井戸の地が備中の国府址で、「御所」の地が備中の国衛址であったことは確実であると思う」と結んでいる。

米倉二郎は、備中の国府は、「岡山県総社市の東部金井戸部落の小字御所ノ内を中心とする一帯」とし「国府の規模は方三町位で、その周辺に半町ほどの外濠を繞らせていたものとされている」と永山説を紹介している。

藤岡謙二郎は、「現総社市東北の東総社から南北国府にあたる方八町城を推定」し、「この推定域に関する限り、現在の「北国府」部落附近に国衛を求めなければならない」としている。ここに初めて備中国府方8町城が示されたわけである。

葛原克人は、「備中国府の最も有力な比定地は総社市金井戸地区で、この一帯は1町四方の広大な条里地割りをとどめ、また『和名抄』にいう〈国府、在賀夜郡〉と合致する。〈北国府〉〈国府西〉〈南国府西〉〈南国府南〉〈御所〉などの字名を残す地はすべて国府域に含まれる。しかし、規模については、方6町説と方8町説とがあり、いずれとも決しかねる。」としている。しかし「御所宮跡をのせた南北線を府域の東限と考え」「南限は地割り線からして国道180号の南1町を走るラインと思われ」。北限と南限については、方6町と仮定して周囲の古社との位置関係を示し一定の規則的な関係を暗示し、「また8町四方を想定した場合、西限地帯に堀または溝の存在を予測させる字名が多数残されている」とする。さらに国の規模が上国であつたから、「以上のいずれかの府域であったに違いない。」と結んでおり、備中国府比定の集大成的なものとなっている。

昭和54年上記の推定府域内の北西部に警察署員宿舎の建設が計画され、岡山県教育委員会による確認調査が実施された。推定域内の初の考古学的調査となつたが、限定的な調査でもあり、国府関連遺構は検出されなかつた。

この他に、中山薰、木下良、小川信の論考もあるが、備中国府の比定について具体的に述べたものではない。

なお、本報告は備中国府跡遺構を検出し難かつたため、各調査区の状況については選択して記述すべきであろうが、国道180号線バイパス道をはじめとする開発計画が進展している現況や、将来再び確認調査が実施されるであろうことを考慮し、できるだけ多くの調査区を収録することとした。

## 第3章 調査の概要

### 第1節 1次調査の概要

#### (1) 調査の方法と概要

1次調査は、昭和60年11月11日から昭和61年1月17日まで行った。発掘調査地選定にあたっては、前述の研究史で比定地に求められている地域をもとに、備中国府跡緊急確認調査指導員の助言をうけて決定した。

備中国府跡の最有力地は、総社市金井戸周辺である。金井戸周辺に国府関連の小字が多いことが比定地根拠の一つになっている。しかし、今まで市内で国府跡の存在を示す遺構・遺物は知られていない。1次調査では、国府跡を知るために中心となる国庁の位置を探ることを第一の目的とした。調査地は、字国府を含む北国府地区と字御所の地区である。

調査は、基本的には幅3m、長さ5~10mのトレンチを設定して実施した。調査が進むにつれ、遺構が希薄であることが分かり調査前に予定していた200mを大きく越える約1,600mが調査対象となった。

北国府地区では、T-1~43までのトレンチを設定した。T-1~4は国府城を八町と考えた場合の中心付近で国庁の存在が考えられたが、遺構・遺物は全時期を通じてわずかであった。T-4の北端近くで微高地の傾斜が認められた。T-7~15では、基盤層が南西方向に傾斜し中世の包含層が認められた。北国府地区は、北と南に河道が入り込む微高地の端に近い場所と考えられる。T-12, 21~30は、現在の住宅の間で中・近世の遺構が検出された。T-26で検出された幅4.5mの溝で区画された地域は、中世の館址の可能性が考えられる。当初この溝が国庁を画する溝の可能性も考えられたので、T-31~36までのトレンチを設定したが、国府跡に関すると思われる遺構は検出できなかった。

御所地区は、北、東、南の三方に河道があり、地形的には制約がある。ここでは、近年地下げが進んでいたため旧状を留める田畠は少ない。今回の調査では、地下げが行われていない地点を選んだ。出土した遺物の中には、弥生時代後期以降の古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の土器が含まれていた。

両地区で、国府跡域内であることを示す遺構・遺物は認められなかった。しかし、御所地区は



第5図 儒中国府跡1次調査地位置図 ( $S = 1/5,000$ )

調査面積が僅かであり、今回の調査だけでは国府跡域内であることを否定することはできない。

## (2) 各トレンチの概要

### 1 北国府地区

#### T-1 (第7図)

北国府地区では、最も西に設定したトレンチである。トレンチは  $3 \times 5$  m で表土下には、2 cm程度の淡黄白色粘質土が認められた。この層の下は、淡茶灰色粘質土になり微高地の基盤層と思われる。ここで基盤層を掘り込んだSD001を検出した。SD001は、最大幅69cm、深さ 3 cmを測るが、出土遺物は無く時期不明である。

#### T-2 (第8・9図)

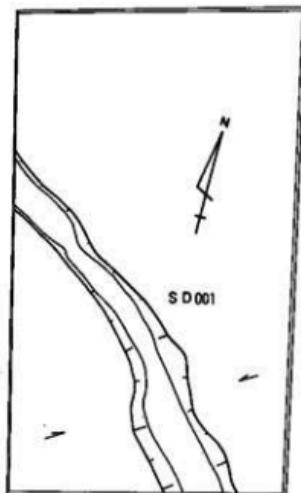
T-1の北東、隣の田一枚挟んで設定した  $3 \times 5$  m のトレンチである。表土下には、T-1同様の淡黄白色粘質土があり、ついで灰色粘質土になる。この層から白磁、土師質高台付碗片などが出土した。灰色粘質土の堆積は、中世と考えられる。以下、淡黄褐色粘質土、基盤層になる。遺構は検出できなかった。

#### T-3 (第8図)

T-2の北東、隣の田一枚挟んで設定した  $3 \times 5$  m のトレンチである。基本的には、T-2と同様の層序でT-2より淡灰色粘質土が薄い。出土遺物も少なく、遺構は検出できなかった。



T-4 (第10~12図)

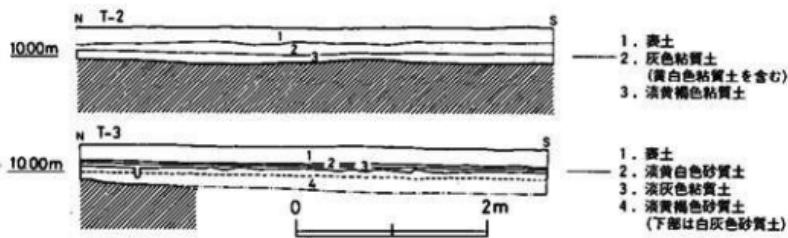


第7図 T-1平面図 (S = 1/80)

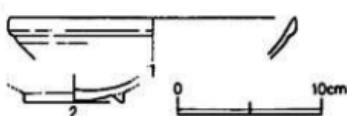
T-3の東、田二枚を挟んで設定した4本のトレンチである。最初に調査地点南部に $3 \times 5\text{ m}$ のトレンチを設定した。層序は、基本的にはT-2と同様である。溝状遺構SD002、003が検出されたため、 $1.5\text{ m}$ 幅で南に拡張した。SD002は幅76cm、深さ16cmを測る。SD003は、幅2.68m、最も深い所で8cmである。他の3本は、いずれも $3 \times 10\text{ m}$ のトレンチである。一番北に設定したトレンチの南端から5.35m位で北向きの傾斜が認められた。微高地が傾斜する手前でSD009を検出した。幅110cm、深さ15cmを測る。トレンチ全体からの出土遺物は少なく、備前焼(3)、須恵器(4)、弥生時代中期土器(5・6)などの小片が出土した。検出した遺構は、溝と畦状の高まりで、古墳時代以前の水田が存在する可能性がある。

T-5・6 (第13図)

北国府集落の中心を東西に通る幹線道から南に設定した $3 \times 5\text{ m}$ のトレンチである。T-1~4までは、集落からやや離れた場所であったが、T-5・6は中心部に近く遺構等の検出が予想された。しかし、遺構・遺物は

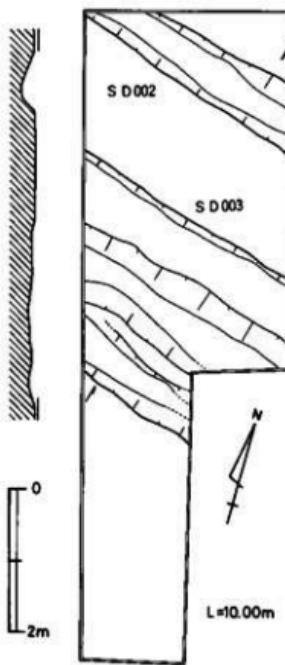


第8図 T-2・3断面図 (S = 1/80)

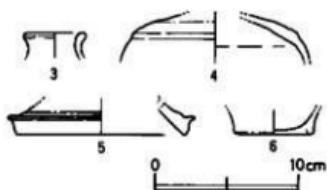


第9図 T-2出土遺物

認められなかった。両トレンチ共に表土直下で基盤層になり、T-1~4に比べると基盤層がやや低くなっている。削平を考慮しても、竪穴住居や柱穴などの遺構が残らないほどの高低差ではないので、本来遺構は存在しなかったと考えられる。



第10図 T-4 平面図 ( $S = 1/80$ )



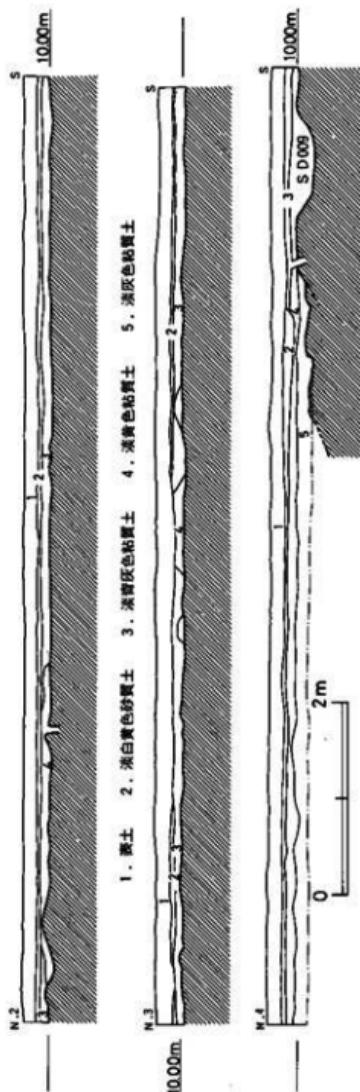
第11図 T-4 出土遺物

T-13

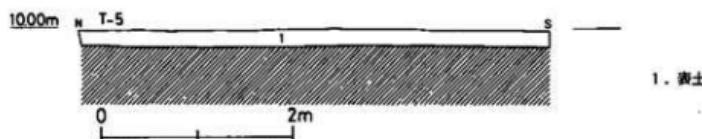
3×11mのトレンチである。T-5・6と同様に表土直下で淡茶灰色粘質土の基盤層となる。遺構は検出できなかった。

T-7・8・9・10・11 (第14~17図)

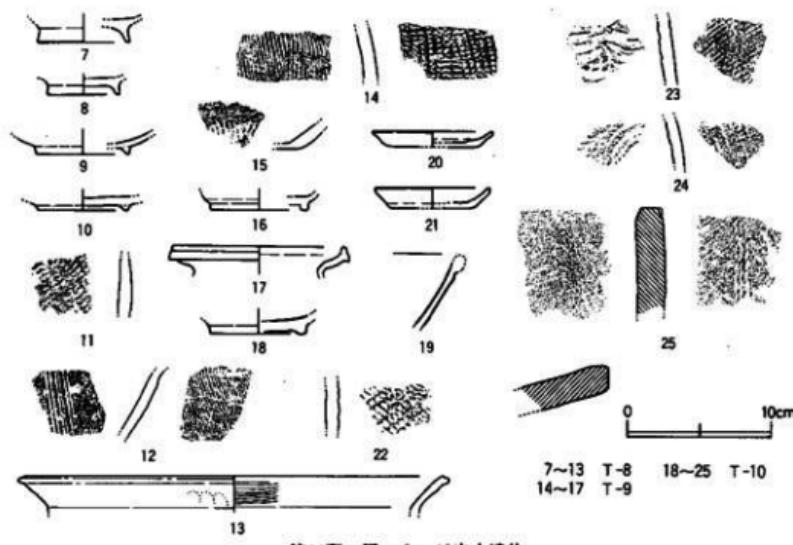
東西に細長い水田で、T-5・6と水田1枚を挟んだ南の水田に設定したトレンチである。



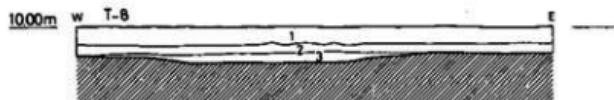
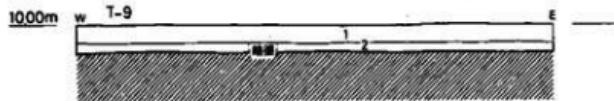
第12図 T-4 断面図 ( $S = 1/60$ )



第13図 T-5断面図 ( $S = 1/60$ )



第14図 T-8~10出土遺物



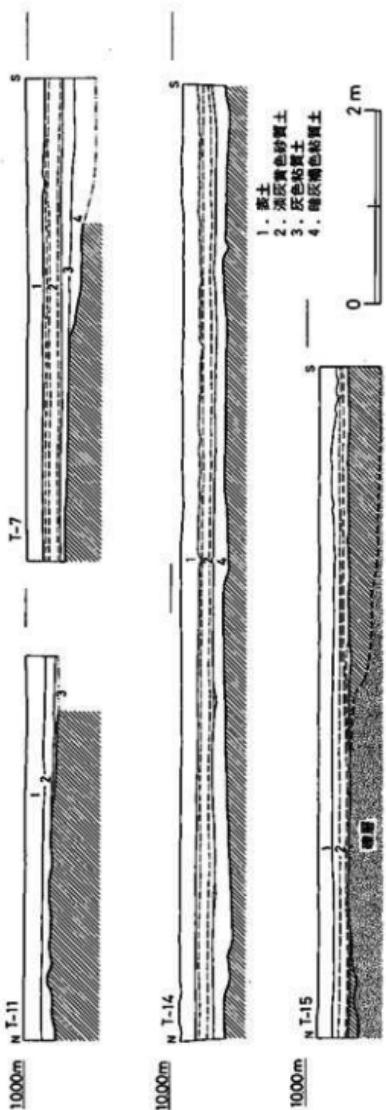
第15図 T-8~10断面図 ( $S = 1/60$ )

T-7を水田中央よりに設定し、表土下の淡灰黄色砂質土を観察すると南にわずかに傾斜して

いることが判明した。下層には2つの包含層が認められた。灰色粘質土と暗灰褐色粘質土である。灰色粘質土の広がりを探るために、T-8～11を設定した。包含層の広がりは、調査区南の条里のみだれと平行するので、河道が存在した時期があったと思われる。T-10から瓦（25）と白磁（18・19）が出土した。中世の包含層と考えられる灰色粘質土の上層からの出土であった。

T-14・15（第16・17図）

T-14・15は、T-7で認められた南斜面を確認するために設定したトレンチである。T-14では、灰色粘質土が無かった。T-15では、疊層が高い位置にあり、この



第16図 T-7・11・14・15断面図 (S=1/80)



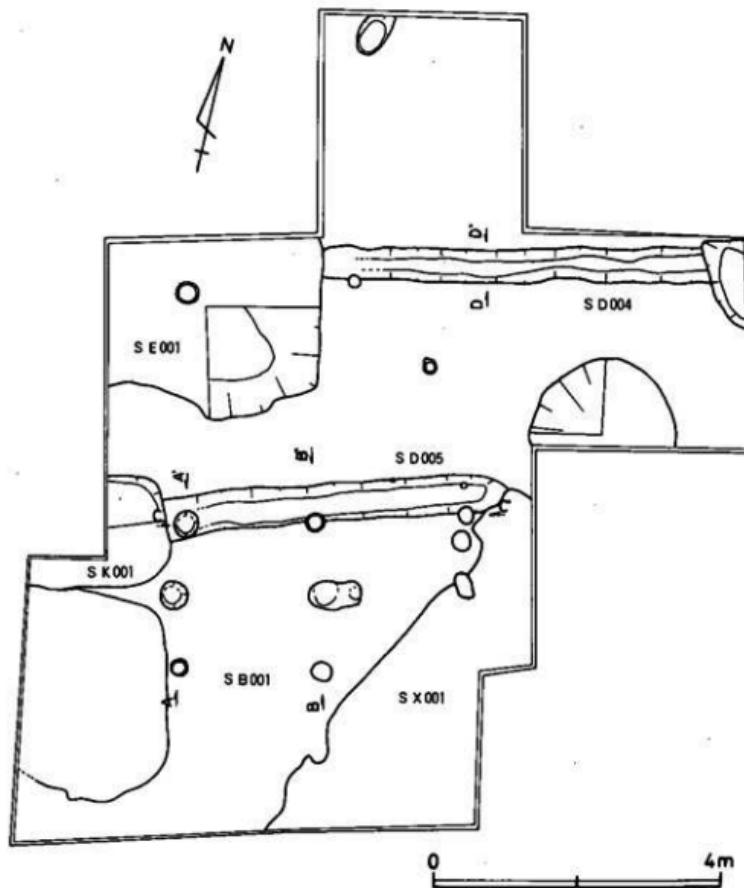
第17図 T-7・11・14出土物

周辺が河原という小字であることと一致する。

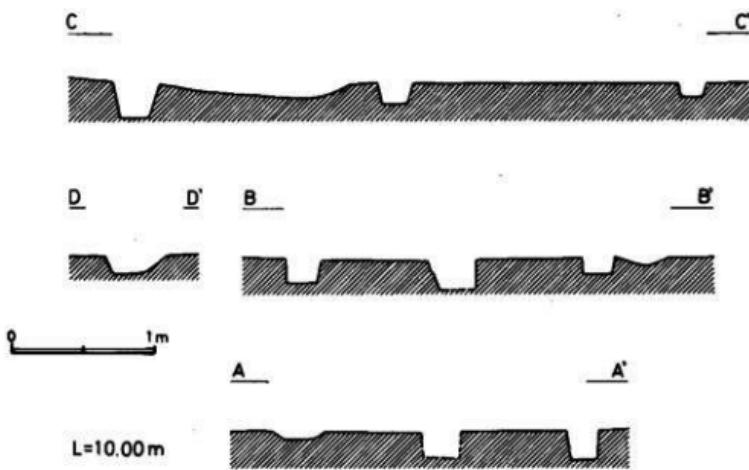
遺物は、磁器片(37)、須恵器片(38)が出土している。

T-12(第18~20図)

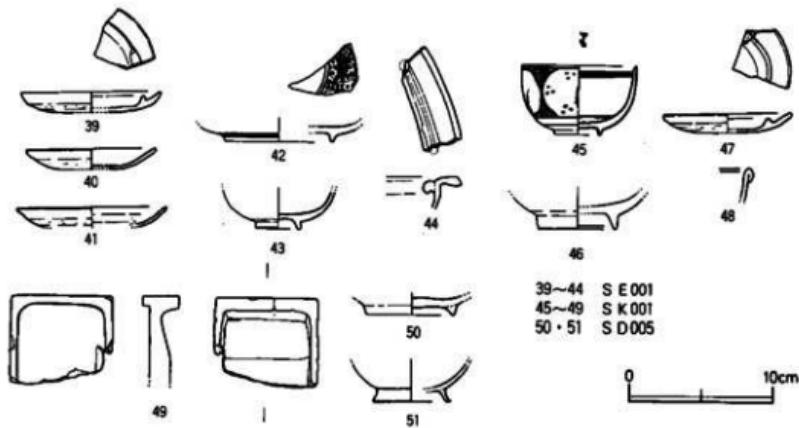
北国府集落にある北公会堂の南に設定したトレンチである。最初、水田の中央に  $3 \times 5$  m のトレンチを設定したが、柱穴等の遺構が検出されたため水田全面に拡張した。遺構の多くは近世の大型土塙である。近世土塙では時期を知るために部分的に調査した。SE001から陶磁器、土



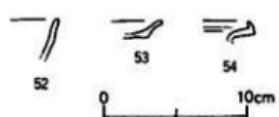
第18図 T-12平面図 ( $S = 1/80$ )



第19図 T-12断面図 (S = 1/40)



第20図 T-12出土遺物



第21図 T-18・19出土遺物

鍋、SK001から備前焼などの陶磁器と石製の硯が出土している。SD004からは遺物が出土していないが、SD005から土師質高台付碗（50・51）が出土している。SD004は幅44cm、深さ12cm、SD005は、幅55cm、深さ6cmを測る。両溝共に埋土は同質の灰白色砂質土が入っていたので中世の溝と考

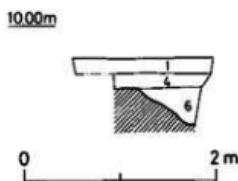
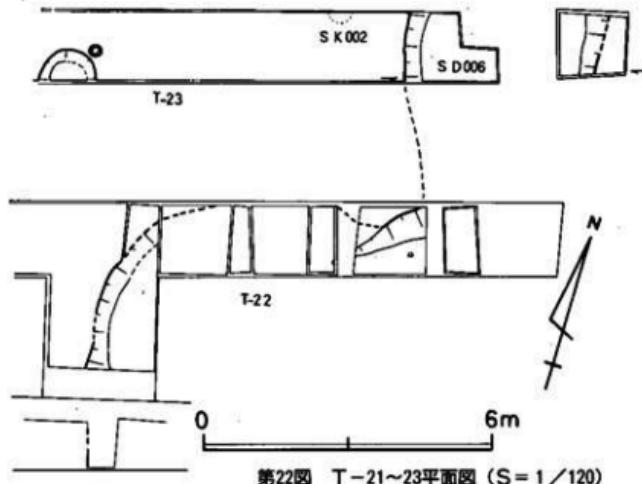
えられる。SD005と重複して検出されたSB001は $2 \times 2$ 間で、切り合いから中世より新しい時期の可能性がある。

#### T-16・17・18 (第21図)

T-14・15の東に設定したトレンチである。ここではT-9に近いことから、微高地の傾斜が検出されることを想定していた。しかし、いずれのトレンチにおいても表土下は、疊層であった。T-16の南端近くで疊層が認められない部分があったので、トレンチを西に拡張した。検出した土壇状の疊を含まない部分は、東西165cm、南北400cmである。断面観察の結果、疊層と土壇状の暗茶色砂質土とは相互に重なり合っていたので、ほぼ同時に形成されたことが判明した。この地点では、地下げの跡が残っているので、これらの疊層は後世人為的に入れられたものと考えられる。遺物は、弥生時代後期土器片(54)がT-18から、他に小片の中・近世土器片が出土している。

#### T-19・20 (第21図)

T-16~18の東側に設定したトレンチである。T-19では表土、暗灰色砂質土、灰色砂質土、

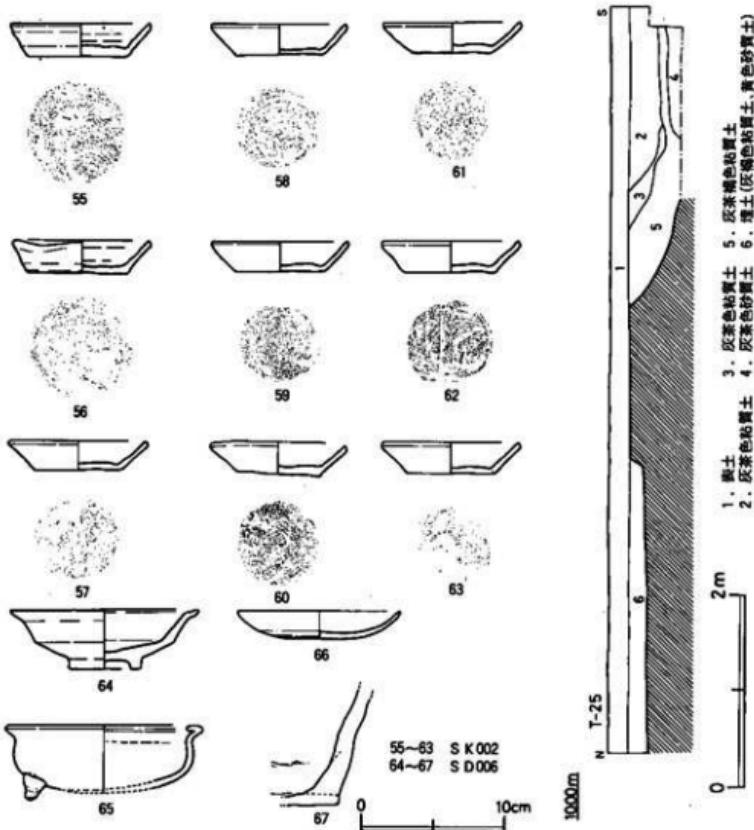


- 1. 表土
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 疋層
- 4. 黄灰色粘質土
- 5. 暗茶褐色粘質土
- 6. 暗灰色砂質土
- 7. 底褐色砂質土
- 8. 黄褐色砂質土
- 9. 深茶褐色粘質土

淡黄青灰色粘質土、青灰色粘質土の層序となる。検出された遺構は、暗灰色砂質土の下で土塙状遺構2カ所が認められ、遺物は無いが、埋土から近世土塙の可能性がある。このトレンチからの遺物は、中世土器片(53)、須恵器片(52)が出土した。T-20では、灰褐色砂質土、黄灰色粘質土の層序となる。トレンチ東壁に平行して溝が検出されたが、近世の瓦が出土した。

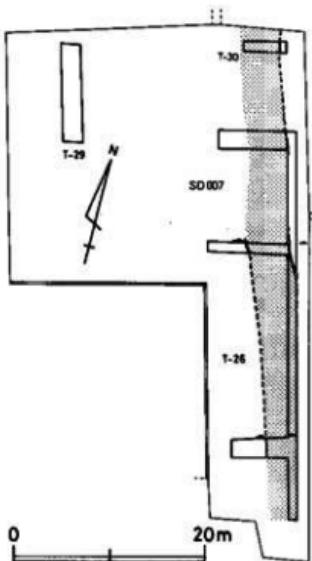
T-21・22・23(第22~24図)

北国府地区の中央やや東よりに設定したトレンチである。T-1~20までは基本的に幅3mのトレンチを設定していたが、遺構・遺物が少ないことが判明したので、ここでは国字を画する南北溝を検出することを目的に、幅1.5mのトレンチを東西に

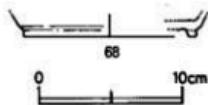


第24図 T-22・23出土遺物

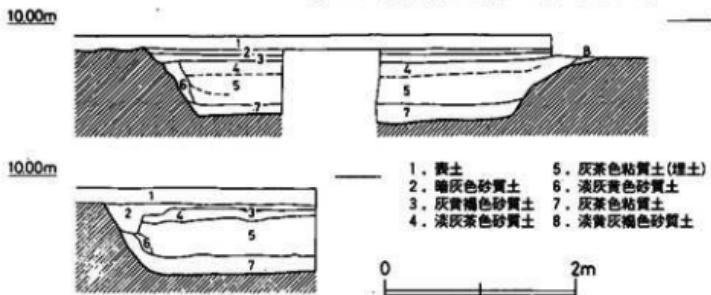
第25図 T-25断面図  
(S=1/60)



第26図 T-26・30溝平面図  
(S = 1/800)



第27図 T-26出土遺物



第28図 T-26溝断面図 (S = 1/60)

長く平行して3本設定した。T-12同様に住宅に近いためか、近世の擾乱が南西部部分に認められた。比較的擾乱を受けていないT-23でSK002、SD006を検出した。SK002からは平安時代と考えられる小皿11枚が出土し、SD006からは、室町期と思われる備前焼、美濃または瀬戸焼と思われる陶磁器などが出土した。SD006はT-22で西に曲がり途切れる状態であった。

#### T-24・25・27・28 (第25図)

T-21~23の西側の小水田に1本ずつ設定したトレンチである。T-24・25・27ではトレンチ南半分が溝状の落ち込みになり、北側の肩を検出した。南肩は道路の下と思われる。T-28では、トレンチ全体が埋土となっていた。遺物は、中・近世土器小片が出土しているが、遺構からの出土遺物は無い。トレンチ南半分の埋土を掘り下げたのはT-25のみである。溝状の落ち込みは、人為的に埋められた状態を示していた。

#### T-26・29・30 (第26~28図)

北国府地区北部、若宮様の所在する土手に近い調査地点である。T-26は、調査地点の東畦に沿って幅1mのトレンチを南北に設定した。国境域を画する北辺の東西溝を検出することを目的としたトレンチである。

調査の結果、南北方向にSD007が検出されたため、西方に3カ所拡張区を設けて溝の規模を明らかにした。

溝の両肩は、南と中央拡張区で検出した。中央拡張区で断面観察を行った。溝の幅は4.5m、深さ0.7mを測る。埋土の大半は、白色、黒色の塊状の土で、人為的に埋められたことが考えられる。これはT-25の南溝状落ち込みの埋土と似ている。

遺物は、南拡張区の底に近い所から須恵器高台付杯片が出た。他に遺物は認められなかった。T-29・30は、SD007の方向を調べるために設定した。T-29では、遺構は検出されず、T-30でSD007の東肩が検出された。

#### T-31~36 (第29~31図)

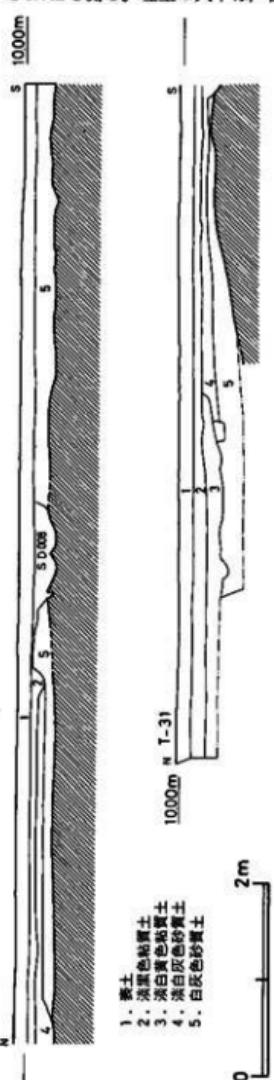
T-31は、T-26・30で検出したSD007が西に曲がる可能性があったので設定した。SD007が国庁域西境とすると北辺が河道により規制される。このためSD007が東境の可能性も考慮した。表土下は南では、白灰色砂質土、基盤層となるがトレンチ中央付近のSD008から北では、白灰色砂質土の上に別の層が認められ、基盤層が傾斜することが判明した。

遺物は、淡黒色粘質土が入ったSD008から須恵器、弥生時代中期土器片が出土した。このトレンチでは、SD007と関連すると考えられる遺構は検出できなかった。

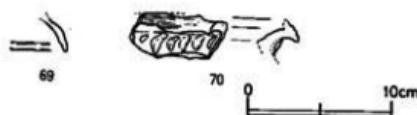
T-32は、SD007に平行する西境の溝を探す目的で設定した。このトレンチにおいても、関連する遺構は認められなかった。

T-34は、T-31で認められた微高地の傾斜を確認するために設定した。このトレンチでは、南北方向の溝と畦状の高まりが検出された。この溝が、現状の微高地と平行しないことから、同一地点に平行してT-35・36を設定した。検出した溝はT-35までは南北方向にあるが、T-36で現在見られる条里の方向に変わる。

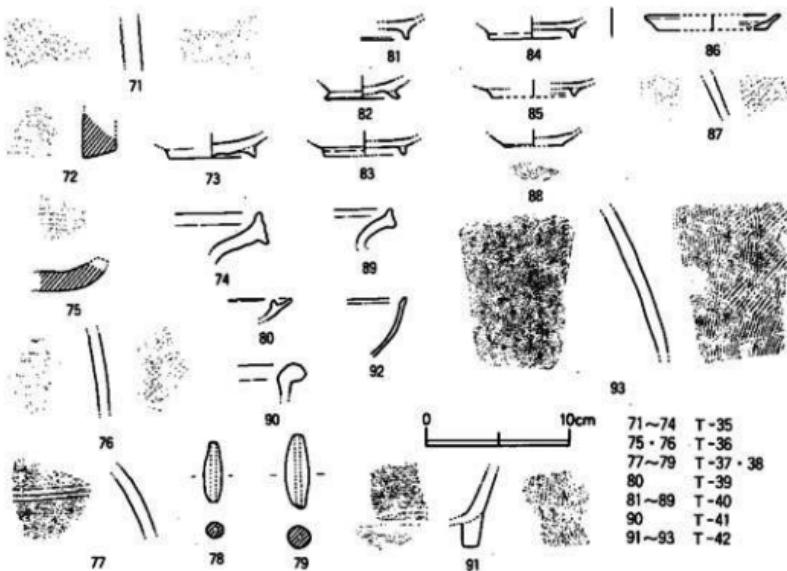
T-31からT-36にかけては微高地の端部にあたり、古墳



第29図 T-31断面図  
(S=1/60)



第30図 T-31出土遺物



第31図 T-35~42出土遺物

時代以前の水田に関する溝、畦状の高まりが広く存在していることが考えられる。

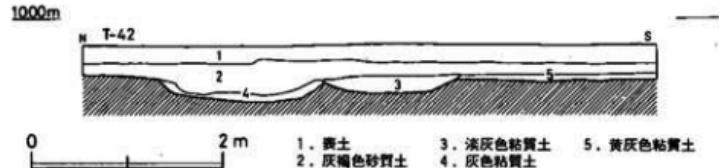
遺物は、少量であるが瓦片（72・75）も出土した。

T-37・38・39（第31図）

T-37は、T-22・23で検出されたSD006が、国府域西境の溝である可能性も考えられたので、北境の溝を探す目的で設定した。表土下1mまで埋土で、下層に青灰色粘質土が認められた。この土は、SD007と似ていて溝の中と認められた。

T-38は、T-37の溝西肩を検出するため設定した。西肩と思われる掘り込みが確認できたが、礫層、砂層が認められ、T-37の埋土とは様子が異っていた。このため、T-39を設定するとともに東へトレンチを伸ばしたが、溝の東肩は検出できなかった。

遺物は、両トレンチ共に少量の中・近世土器片が出土しただけであった。



第32図 T-42断面図 (S = 1/60)

#### T-40~42(第31・32図)

SD006を検出したT-21~23の南東に設定したトレンチである。この地点では地下げを行った後、御所の土で埋めたといわれている。

T-40は、 $2 \times 23\text{m}$ で南北方向に設定した。基盤層が認められたのは北端70cmだけで、南部分は埋土であった。

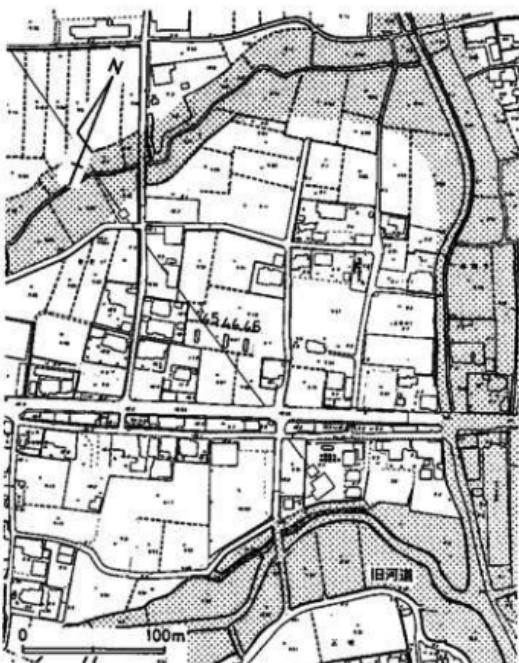
T-41は、T-40と直交する方向に設定した。トレンチの中央近くから東側が埋土になる。

T-42は、T-41の状況から調査地点西側にL字状に設定したトレンチである。トレンチ東端60cmが埋土であった。T-41では表土直下に認められた基盤層が、T-42の南壁観察では30cm低い高さで認められた。T-42の南端近くで東西溝を検出した。

#### T-43

T-43は、T-42で検出した東西溝追求のために設定した。ここでは、近代の暗渠が2本東西に入っていて、溝は検出できなかった。遺物は、少量の中・近世土器片が出土した。

#### 2 御所地区

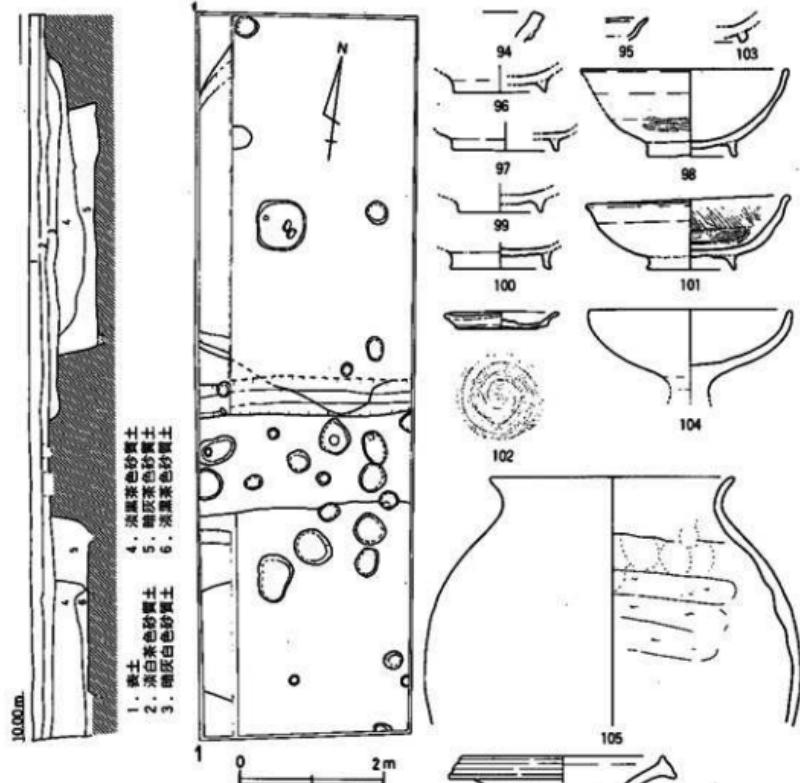


第33図 御所地区トレンチ位置図 ( $S = 1/4,000$ )

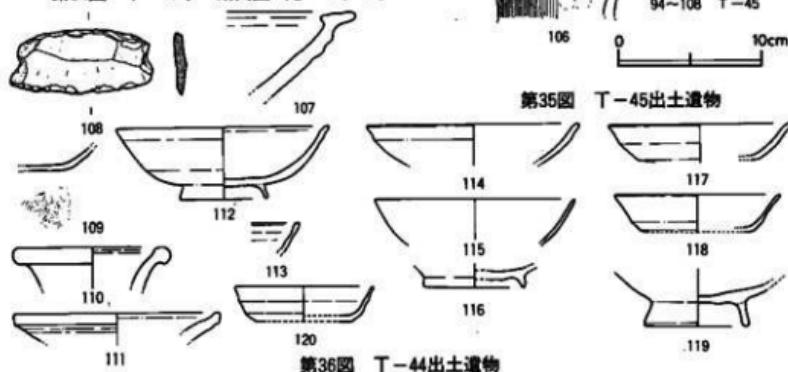
#### T-45(第34・35図)

御所宮から南西方向に位置する水田に設定した。T-45は調査地点西端近くに設定した $3 \times 5\text{m}$ の規模のトレンチである。この地点北の水田は、すでに地下げで60cm程度調査地点と高低差がある。本地区は北国府地区に比べて、遺構・遺物の密度が濃い地区であった。

表土下は基本的には、淡白茶色砂質土になり、この層は中世の包含層と考えられる。遺構検出は、基盤層上面で行った。上面で検出した遺構は、柱穴、土塙で、西壁沿いの断面観察用トレンチでは弥生時代と考えられる住居址の一部

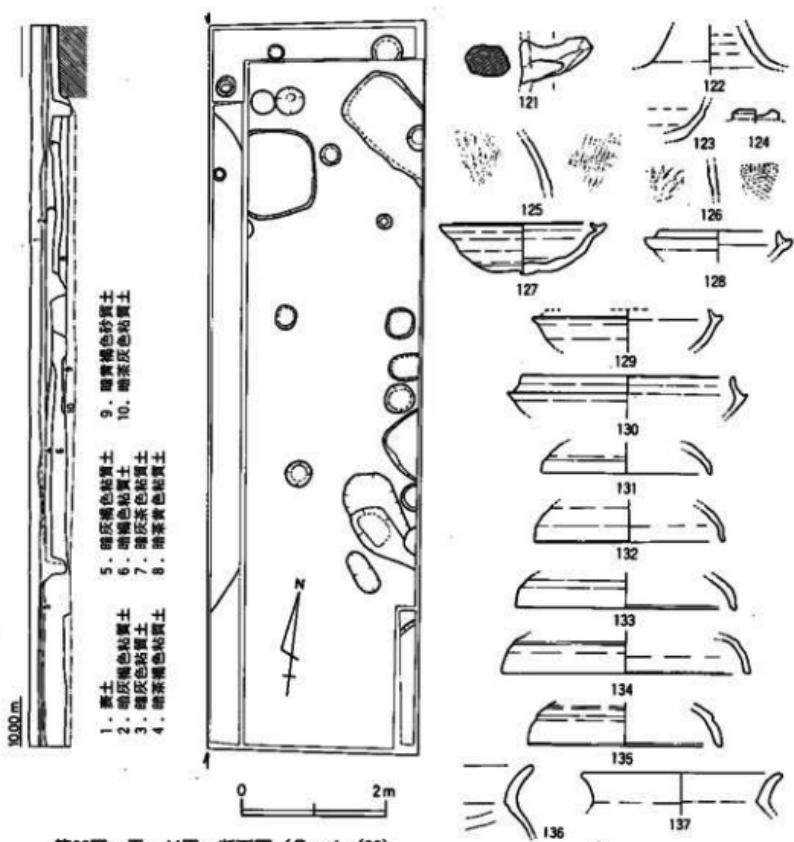


第34図 T-45平・断面図 ( $S = 1/80$ )

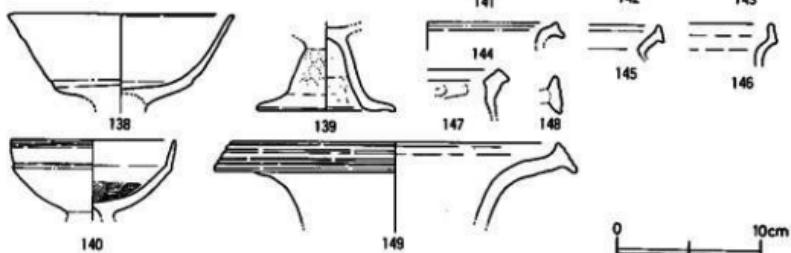


第35図 T-45出土遺物

第36図 T-44出土遺物



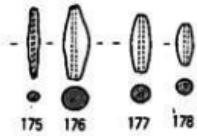
第38図 T-44平・断面図 ( $S = 1/80$ )



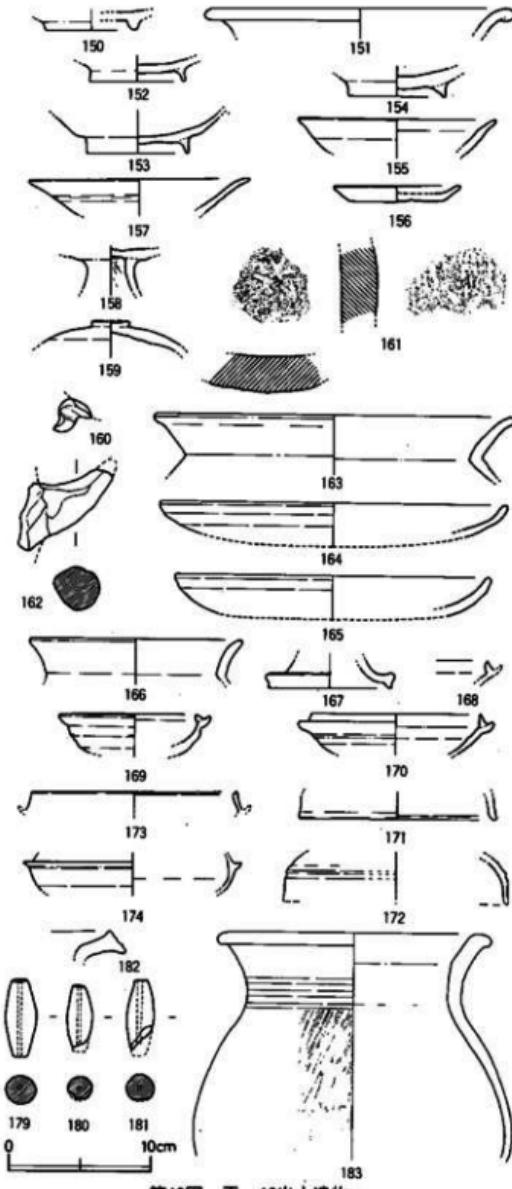
第37図 T-44出土遺物



第39図 T-46断面図  
(S = 1 / 60)



3. 淡灰系色砂質土  
4. 酸灰黑色砂質土(薄削断?)



第40図 T-46出土遺物

を2カ所確認した。

遺物は、備前焼(94・95)、中世土器(96~102)、奈良時代須恵器(103)、古墳時代土師器(104・105)、弥生時代後期土器片(106・107)、石庭丁(108)が出土した。

T-44(第36~38図)

T-44は、T-45の東隣に設定した3×5mのトレンチである。検出した遺構は、T-45と同様に柱穴、土塙が多い。ここでも西壁沿い断面観察用トレンチで弥生時代の円形住居址の一部を確認した。微高地の基盤層は、トレンチ北端部のみで認められた。

遺物は、備前焼(109・110)、中世土器(111~117)、奈良・平安時代須恵器・土師器(118~120)他に古墳時代から弥生時代後期までの遺物が出土した。

T-46(第39・40図)

T-46では、中世の遺構は認められず、古墳・弥生時代の包含層が確認された。南部分は溝の一部と考えられた。

遺物は、備前焼(151)、中世土器(152~156)、綠釉陶器(157)、白磁(150)、瓦(161)、古墳・奈良時代須恵器、土師器(158~160・162~174)、弥生時代後期土器片(182・183)、土鍋(175~181)などが出土した。

### まとめ

備中国府跡緊急確認調査の1次調査では、従来の国府域推定地内で国庁を探すことを第一の目的として行ったが、特に北国府地区は、国庁の最有力候補地であった。

北国府地区では、発掘前には予想しえなかった河道の広がりが北と南に確認された。このため、本地区がかなりずしも推定国府城の中で安定した場所とはいえず、国府存続期も含め古代以前の遺構の密度も極めて薄く、遺物も少なかった。

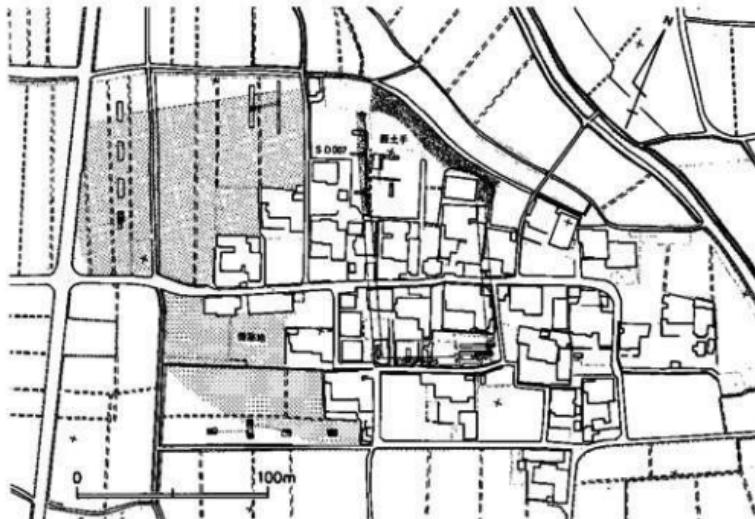
古代以前の遺構は、T-31~36、T-4で検出した溝、畦状遺構などで、本地区内で集落跡の存在は否定的であった。遺物では、中・近世の土器片が多く出土し、わずかながら、T-10・35・36でそれぞれ瓦小片が一点ずつ出土しただけであった。

本地区で検出した遺構の中で最も注目されたのは、T-26のSD007である。SD007は、幅4.5mと規模も大きく、高台付杯片が出土した。しかし、この溝は、国庁域を区画する溝としては、方位が大きく真北からずれることや、より安定した地域と考えられる西には、関連遺構は検出されなかったことから国庁関連とは考えられなかった。むしろこの溝と関連すると考えられる遺構は、調査区南のT-21~25・27・28で検出した室町期以降と考えられるSD006と溝状落ち込みであった。T-24・25・27ではトレンチ南半分が溝状の落ち込みとなり、埋土もSD007と似ていた。T-28はトレンチ全てが埋土であったが、この位置はSD007の南延長上にあたる。

T-22・23で検出したSD006は、埋土状態がSD007とは異なる。しかし、調査地点東の道路が周辺の道と方位が異なり、SD007に平行する方位をとると考えられる。また、SD007とSD006を北の河道まで延ばすと、現在見られる蔽土手が北を塞ぐかたちになる。調査した地点が住宅の間に残るわずかな水田のみで、十分な溝の追求や区画された溝の中の遺構など明らかにはできなかった。これらの制約があるので決め手を欠くが、SD007、SD006、蔽土手に囲まれた地域に中世の館址を想定した。これは、長辺150m、短辺60mとなり、市内真壁遺跡で検出された長辺150m、短辺85mの長方形を画する土臺の館址と類似する。

本地区では、国庁を示す遺構は検出できなかった。1次調査では、北国府地区の住宅周辺近くまでトレンチを設定した。しかし、集落の中心部は中世の館址が想定でき、北と南は河道が入り込む。本地区は遺構の存在が想定できる微高地であったが、ここで検出できた遺構は中世のものであった。これらの遺構残存状態から、後世の削平により中世以前の遺構の多くが無くなかったとは考えられなかった。国庁の位置は小字などを手掛かりに北国府地区に想定したが、推定国府城で国庁の位置を、東辺ぞいに考えているのは備中国府のみであることからみても、この地区に国庁を想定することは、今回の調査からは、きわめて困難と考えられる。

御所地区は、周辺の地下げが進み1ヵ所の水田しか調査できなかった。ここでは、多くの遺構が検出されたが、官衙を想定できる大型掘方の建物などは無かった。しかし、遺物ではわずかに古代のものもあり、将来に可能性を残した。



第41図 北国府地区中世館址及び微高地の広がり (S = 1/3,000)



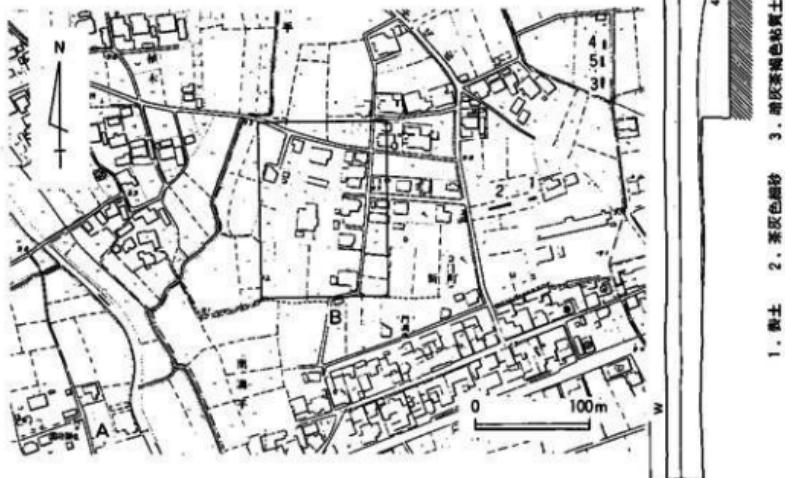
第42図 備中國府跡 2次調査地位置図 ( $S = 1/15,000$ )

## 第2節 2次調査の概要

### (1) 調査の方法と概要

1次調査は、「国府」を冠する字名の集中する北国府集落とその周辺及び伝備中国府跡に近接する部分で調査を実施したが、国府の存在を示す資料は得られなかった。2次調査は、時期は異なるが、遺構・遺物の検出された「御所」付近で継続して調査を行うのに加えて、海拔高の高い推定域の北西部、推定域からやや東に離れるが国府の名を冠する「国府殿田」の地区、總社宮に近接する刑部地区など、東西およそ3kmに及ぶ範囲で調査を実施した。しかしながら発掘の対象となる水田は、耕作の便のため、あるいは瓦土の採取などによって削平された所が多く、調査地自体は限定されることになった。

調査の方法は、包含層・遺構の有無、ひろがりを把握するため、幅1.5m、長さ5~10m程度のトレンチを設定し、遺構の認められた場合は、適宜拡大することにした。発掘調査は昭和61年11月25日から昭和62年2月7日まで行い、調査実施面積は1,527m<sup>2</sup>である。



A : 伝備中国府跡

B : 梵寺庵寺跡

第44図

T - 2 断面図  
(S = 1 / 80)

第43図 T - 1 ~ 5 位置図 (S = 1 / 5,000)

## (2) 各トレンチの概要

### T-1

T-1 (1.5×5 m) では、表土直下で安定した基盤層となる。トレンチの中央付近で直径20cmほどの焼土のひろがりが認められたが、遺物はなく、時期は不明である。

### T-2 (第44・45図)

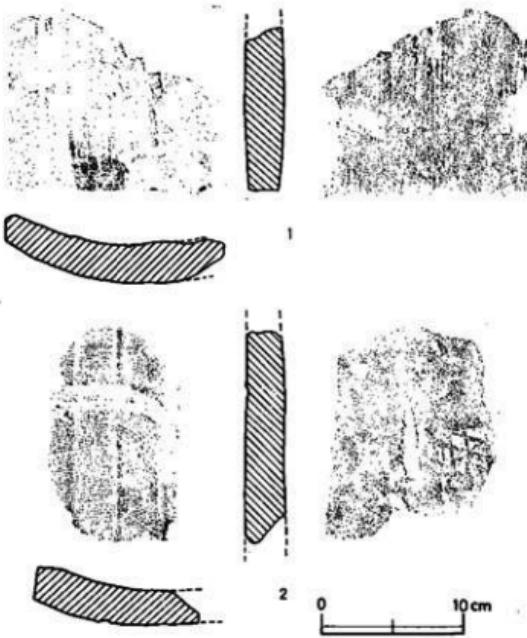
T-2 (1.5×15 m) は、T-1 の西30mに設定した。表土下の茶灰色細砂から平瓦の破片（第45図）などが出土した。この層は厚さ30cmほどで、その下に厚さ20cmの弥生時代から古墳時代にかけての包含層がある。出土遺物は平瓦の破片のか、弥生土器片、古墳時代の須恵器細片などがあるが、いずれも遺構に伴うものではない。この地点は、栢寺魔寺の東50mの位置で、字名が栢寺前であることから出土した平瓦については栢寺魔寺に伴うものと考えられる。

### T-3~5

T-1・2 から北東約100mの位置である。字西ノ鼻。いずれも1.5×5 mで、T-3では、表土下で厚さ15cmほどの円錐含みの粗砂、その下は円錐を疊にまじえる茶褐色の粗砂となる。北端近くに設定したT-4では、表土下で茶灰色細砂となり、その下約40cmは、灰茶色の粗砂である。T-3・4の中間に設定したT-5も、T-4とほぼ同様の状況である。微高地上とは考えられるが、出土遺物はない。

### T-6~9 (第47・48図)

座木の集落の北側に位置し、長良山に近接する。字宮後。今回調査範囲の東端にあたる。T-6~8は1.5×5 m、T-9は1×5 mのトレンチである。いずれも表土直下で灰茶色細砂の基



第45図 T-2 出土遺物



第46図 T-6～80位置図 (S=1/5,000)



第47図 T-6断面図 ( $S = 1/60$ )

盤層となり、弥生時代の遺構の存在が認められる。T-6（第47図）では、柱穴および土塙の一部がトレンチ断面で検出された。T-7および9では、竪穴住居址の一部と思われる遺構が検出されている。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものが主体となるが、T-9では須恵器の細片も出土している。

#### T-10~12（第49図）

T-6～9から北西へ300mの位置でいずれも $1.5 \times 5$ mである。字中道。表土下の厚さ10cmの黄灰色土の下で黄褐色砂質土の安

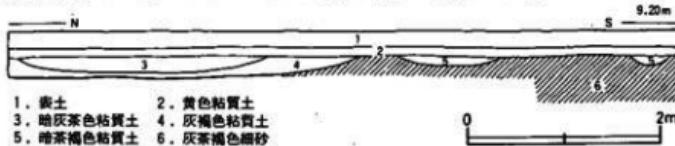


第49図 T-10断面図 ( $S = 1/60$ )

定した基盤層となる。T-10では、弥生時代と思われる黄褐色砂質土の埋積した幅80cm、深さ15cmほどの溝と径60cmほどの土塙各1が検出されている。T-11、12も土層の構成は同様であるが、遺構・遺物は検出されていない。

#### T-13~20（第50図）

T-6～9から西へ300mの位置である。字五反地。T-15は $1.5 \times 7$ m、他は $1.5 \times 5$ mである。表土下の黄色粘質土の下は基盤層である。遺構はT-15で溝、土塙、T-17で溝がそれぞれ検出された。出土遺物は、T-15・16で弥生土器片、須恵器破片があったほか、T-17で青磁の細片も出土している。これらのことから遺構は中世の可能性がある。



第50図 T-15断面図 ( $S = 1/60$ )

#### T-21・22（第51図）

T-10～12・T-13～20のほぼ中間にあたり、T-13から北約200mの位置で、いずれも $1.5 \times 10$ mである。字ト井元。T-21は、4層に暗灰茶色粘土があり、この層は南に向けて徐々に厚

くなる。南端近くで長さ3mにわたってこの層を掘り下がったが、造構は認められない。この上面から、土師器、須恵器、早島式土器などの細片が出土する。

T-22は、T-21から東70mの位置である。T-21で認められる暗灰茶色粘土があり、須恵器破片のほか、縄文時代と思われる土器の細片がある。微高地の縁辺部に近い位置にあたると考えられる。



第51図 T-22断面図 ( $S = 1/80$ )

T-23~27 (第52図)

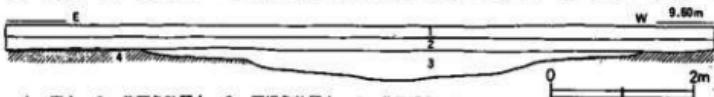
T-10~12から西約300mのJ  
R吉備線より北の位置で、いずれも  
1.5×5mである。字楠木。  
表土下に厚さ10~15cmほどの灰  
黄色粘質土があり、その下は暗  
灰色粘質土である。土層の状況はT-21・22と同様である。T-23で早島式土器の破片を出  
土する他は、T-24~27の暗灰黄色粘質土上面で磨滅した土器片数点が出土したにすぎない。

T-28~30

T-23~27から西200mの位置である。字新町。いずれも1.5×10m。T-28では、表土下に厚  
さ15cmの黄灰色粘質土があり、その下は淡灰褐色砂質土である。T-29は、黄灰色土10cm、灰  
黄色土10cmで、その下が淡灰褐色土である。南端の2mの範囲を面的に掘下げたが、造構は認め  
られない。T-28・30で土師器、須恵器の細片が出土している。

T-31~35 (第53図)

T-28~30から道路を隔てて西に位置する。T-31 (1.5×10m) ではトレンチに斜交する溝  
(幅約3m、深さ40cm) が検出された。溝の埋土からは早島式土器の細片が出土している。T-  
32 (1.5×10m) は、表土下に厚さ30cmほどの黄灰色粘質土があり、その下は灰褐色粗砂である。  
T-33~35は、T-31の溝のつながりを確認するために設定した。T-34 (1.5×5m) では、

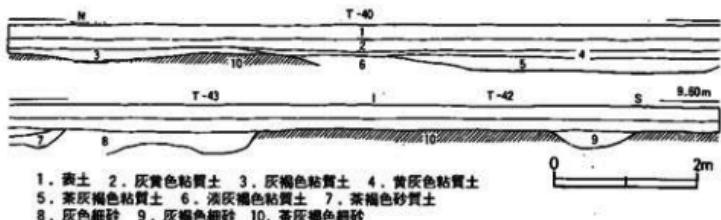


第53図 T-31断面図 ( $S = 1/80$ )

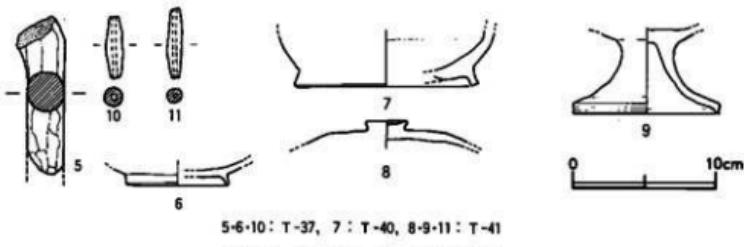
溝がさらに東に向てのびることが確認されたが、南にはT-33(2×5m)で不整形の落ち込みが認められたにとどまる。溝のほかには遺構は検出されなかった。遺物は僅少である。

#### T-36~45(第54・55図)

T-31~35の南に隣接する。字荒神後。T-38・39・42・43・45が $1.5 \times 5\text{m}$ 、他は $1.5 \times 10\text{m}$ である。T-36は、表土下に黄灰色粘質土、灰色粘質土がそれぞれ10cmあり、その下は暗灰色粘質土となる。西半では下層が粗砂となる。T-37・41・38(計25m)およびT-40・43・42(計20m)のそれぞれ中ほどに幅10mほどの河道と思われる堆積があり、古代ないし中世の遺物が散見される。T-42では、幅1mほどの溝が認められたが、つながりについては不明である。T-38の南端からT-39にかけては、表土直下で安定した基盤層となる。



第54図 T-40・43・42断面図 (S = 1/80)



第55図 T-37・40・41出土遺物

#### T-46

T-31の北100mの位置で、湛井十二箇郷用水より北にあたる。字孤グロ。 $1.5 \times 10\text{m}$ 。表土下で灰茶色粗砂(基盤層)となり、深さ50cmまで確認した。遺構、遺物は認められない。

#### T-47~50(第56図)

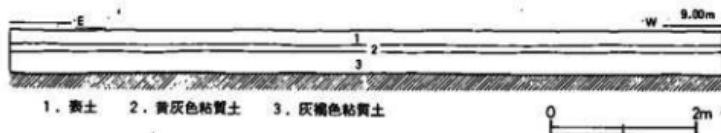


第56図 T-50断面図 (S = 1/80)

T-46の東200mである。いずれも $1.5 \times 10\text{m}$ 。T-50では、表土下に厚さ10cmの黄褐色粘質土があり、中世と思われる土器片が少量出土する。その下は厚さ約15cmの灰褐色粘質土があり、その下は灰色の粗砂となる。他もほぼ同様な状況であり、T-21~30に似ている。

#### T-51~53 (第57図)

T-27から北30mほどの位置である。T-51・52は $1.5 \times 10\text{m}$ 、T-53は $1.5 \times 5\text{m}$ である。T-51は湧水のため掘下げできなかった。T-52・53は、表土下が黄灰色粘質土で、その下は灰褐色粘質土である。T-51で瓦の細片、T-52・53で中世の土器片などが出土している。

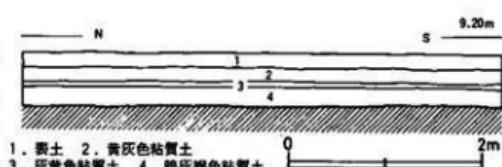


第57図 T-52断面図 ( $S = 1/80$ )

#### T-54~58 (第58図)

T-23~27とT-47~50の間  
に挟まれる部分である。字射田。

T-57は $1.5 \times 15\text{m}$ 、他は $1.5 \times 5\text{m}$ である。T-54では、4層

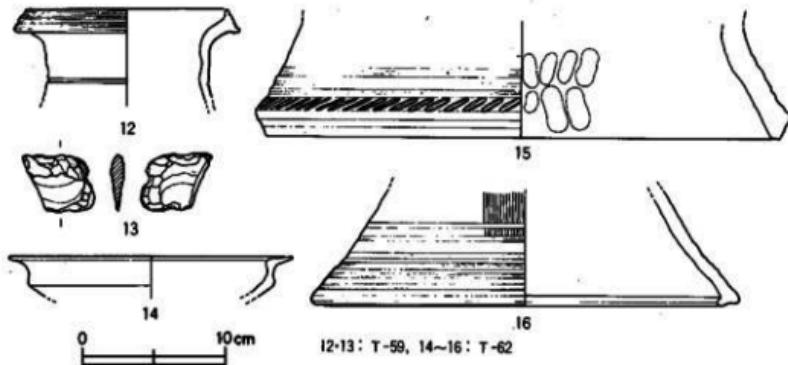


に厚さ20cmほどの暗灰褐色粘質  
土があり、弥生時代の包含層と思われる。T-57では瓦の破片が出土している。

第58図 T-54断面図 ( $S = 1/60$ )

#### T-59~65 (第59図)

T-44から南100mの位置でJR吉備線服部駅の北西の線路沿いである。字荒神元。T-59は



第59図 T-59・62出土遺物

$1.5 \times 35m$ , T-62は $1.5 \times 10m$ , 他は $1.5 \times 5m$ である。表土直下で安定した基盤層となり, T-59では断面に柱穴・土塙, T-62で土塙が検出された。弥生時代後期と思われる。弥生土器・石器のほかT-59・63で須恵器の破片も出土している。

T-66~80 (第60・61図)

宇国府殿田の南東端部で,

T-13~20の北西100mの位置

である。T-76は,  $1.5 \times 25m$ ,

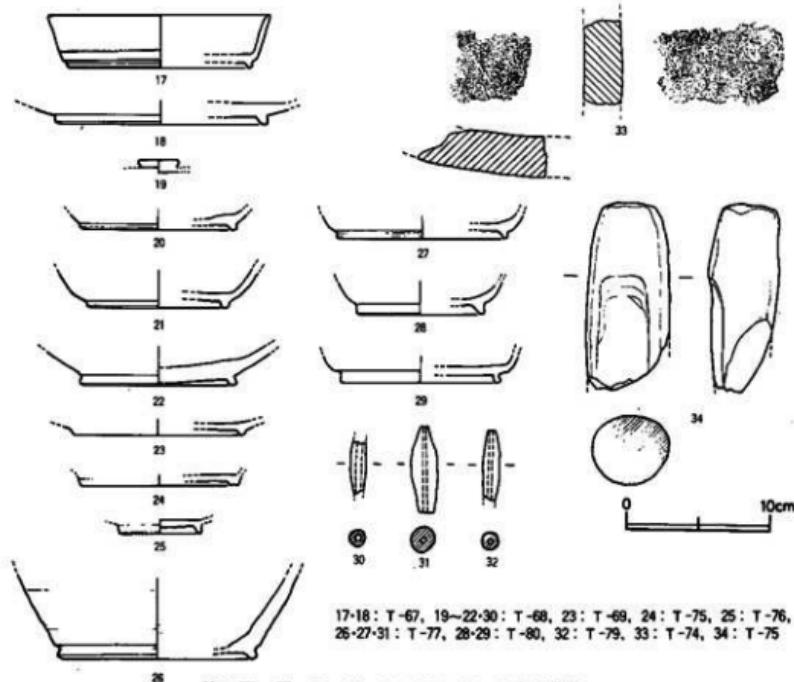
T-77は,  $1.5 \times 24m$ , 他は $1.5$

$\times 5m$ であるが, 包含層の認



第60図 T-73断面図 ( $S = 1/60$ )

められる部分を拡張したため, T-67・80・68, T-74・79・75は, それぞれつながって $1.5 \times 1.5m$ である。基本的な層序は表土の下に灰黄色粘質土 (15~20cm), 暗灰茶色粘質土 (5~15cm), 茶褐色砂質土 (基盤層)となる。T-77では, 暗灰茶褐色土の下層部に焼土の分布が認められた。出土遺物は, 弥生土器, 石器, 土師器, 須恵器, 瓦の破片などがある。



第61図 T-67~69, 74~77, 79, 80出土遺物

T-81・82 (第63図)

北国府集落と北満手集落のはば中間に位置し、推定八町域の東辺近くである。字和田前。いずれも $1.5 \times 10m$ である。表土下の黄灰色粘質土の下は淡茶褐色細砂となる。地形からみると調査地の東・西・北の三方は河道となっていたようであり、小さな微高地上と思われる。出土遺物は、土師器・須恵器の細片がある。



第62図 T-81・82位置図



第63図 T-82断面図 ( $S = 1/80$ )

T-83~85 (第65~68図)

字御所の伝備中國府跡の南西50mの位置で、1次調査の際遺構・遺物が多く検出された調査地に隣接し、国道180号線の北側である。T-83は $1.5 \times 25m$ 、T-84は $3 \times 15m$ 、T-85はT-83と84の間の $38.2m^2$ である。

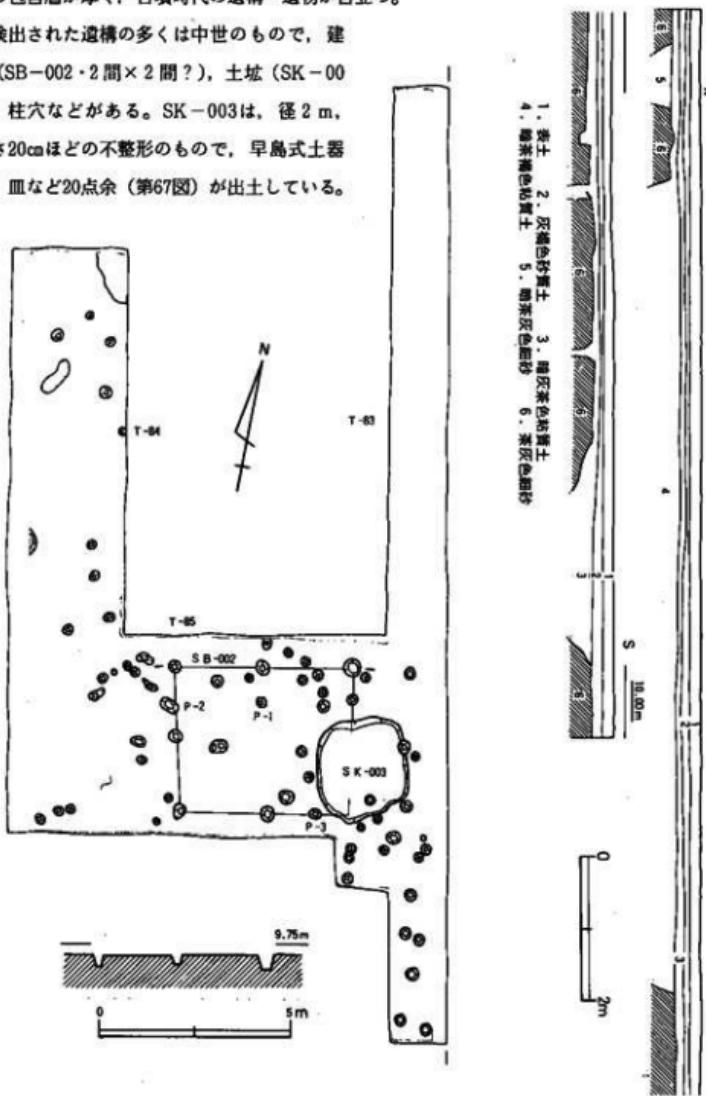
T-83では、表土下に灰褐色砂質土、暗灰茶色粘質土の堆積があり、それぞれ中世および古墳時代後期の包含層である。調査区の南半部で中世の遺構・遺物が多く認められたため、西に



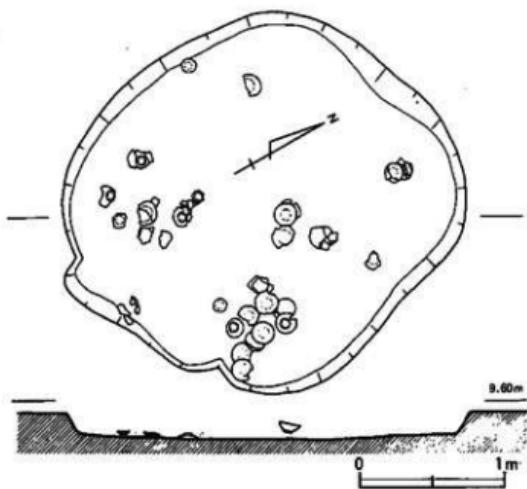
第64図 T-83~89位置図 ( $S = 1/5,000$ )

向けて調査区を拡張し、T-85とした。T-84は、T-83と同様の傾向であるが、古墳時代後期の包含層が厚く、古墳時代の遺構・遺物が目立つ。

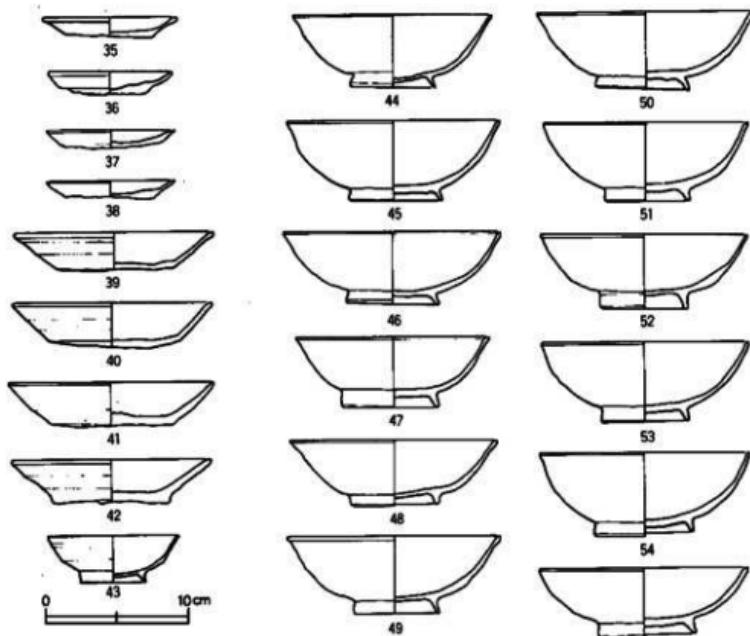
検出された遺構の多くは中世のもので、建物(SB-002・2間×2間?)、土塙(SK-003)、柱穴などがある。SK-003は、径2m、深さ20cmほどの不整形のもので、早島式土器碗、皿など20点余(第67図)が出土している。



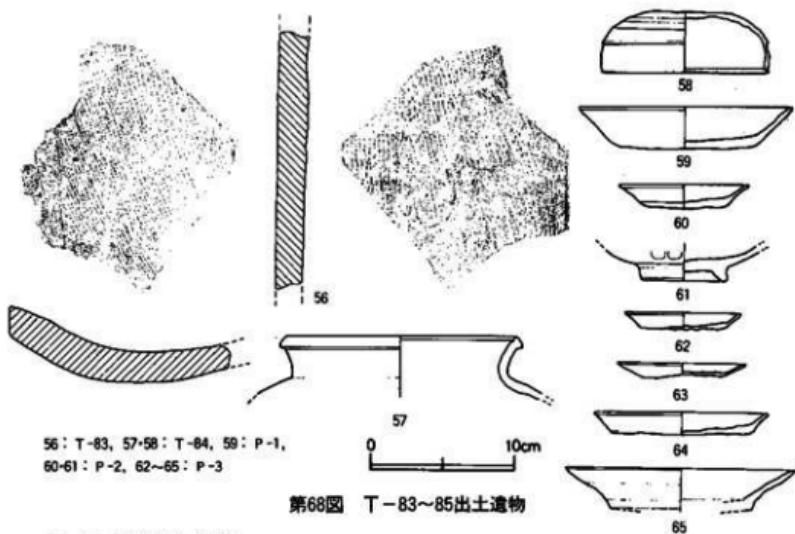
第65図 T-83~85遺構配置図 ( $S = 1/150$ ) とT-83断面図 ( $S = 1/80$ )



第66図 T-83 SK-003平・断面図 (S = 1/40)



第67図 T-83 SK-003出土遺物

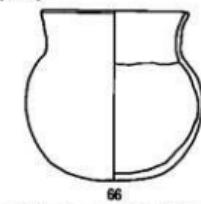
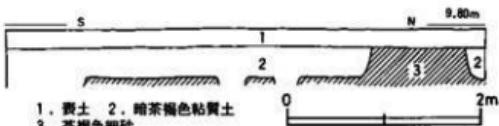


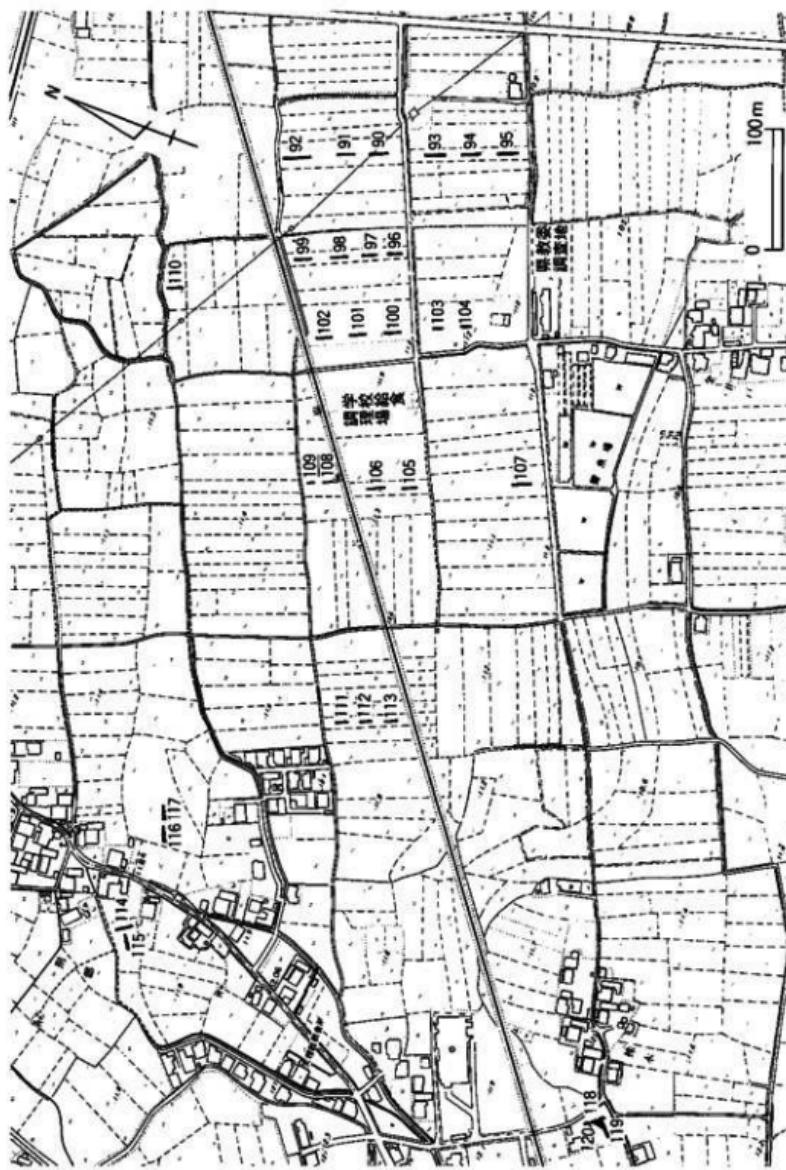
T-86~89 (第69・70図)

宇南国府西で、推定城南端部に位置する。国道180号線以南の唯一の調査地点である。T-87は $1.5 \times 10m$ 、他は $1.5 \times 5m$ である。いずれも表土直下で基盤層（茶褐色細砂）となる。T-86・87で弥生時代後期と考えられる溝が検出されている。T-89 (第69図)では、古墳時代前半の竪穴住居址の一部を検出している。遺物はT-86で弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土したほか、T-89の壺形土器 (66) がある。

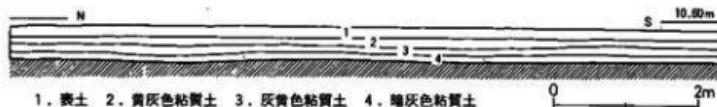
T-90~95 (第72図)

字国府西で、1次調査を実施した範囲より北西の位置である。T-92は $1.5 \times 15m$ 、他は $1.5 \times 10m$ である。T-90は、表土下に黄灰色粘質土があり、須恵器破片などが若干出土する。その下に灰黄色粘質土、暗灰色粘質土があわせて20cmほど基盤層の上に堆積する。T-91では、トレンチの北端から幅2mにわたって暗灰色粘質土の上部に灰色粘質土の堆積があり、凹部となっていたようである。北端に位置するT-92では、3層めの灰黄色粘質土がなく、暗灰色粘質土が厚さ15cmほどあり、基盤層は黄褐色砂質土である。





第71図 T-90~120位置図 (S = 1 / 5,000)

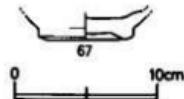


第72図 T-90 (上)・93断面図 (S = 1/80)

T-93~95は、T-90~92から道路を隔てて南の水田である。T-93では、表土下に淡灰色砂質土、暗茶褐色粘質土があり、その下は淡茶褐色細砂で、この層は北に向けて傾斜する。T-94・95では、表土下10~20cm程度で基盤層となる。T-90・91・94でごく少量の遺物を検出したにとどまる。

#### T-96~99 (第73・74図)

字横閑で、T-90~92から西約50mの位置である。いずれも $1.5 \times 10$ m。表土下に灰茶色粘質土、暗灰色粘質土があり、



その下は灰褐色砂質土で基盤層と考えられるが、これには鉄分のかたまりなどが多く含まれ、あまり安定した状況とは言いがたい。T-96で白磁の破片(67)と須恵器の細片などが出土している他に遺物はない。



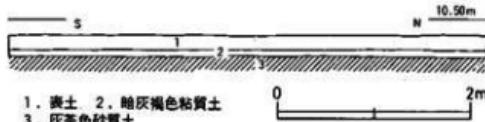
第74図 T-99断面図 (S = 1/80)

#### T-100~102

字横閑で、T-96~99よりさらに30mほど西である。表土下で暗灰色粘土となるが、これは瓦土を採取したのちに他から移したものといわれる。湧水が激しいため掘下げは中途で断念せざるを得なかった。

#### T-103~106・108・109 (第75図)

T-103・104は、字金添田



で、T-100~102から道路を

隔てて南に隣接する。 $1 \times 5$

m。T-105・106・108・109

は、字大溝でT-105・106は

第75図 T-104断面図 (S = 1/80)

$1 \times 10m$ , T-108・109は $1 \times 5m$ である。表土下は暗灰褐色粘質土で、その下は黄褐色のブロックがまじる灰茶色砂質土となり、基本的にはT-96～99と同じである。出土遺物は、T-106で早島式土器の細片が出土したにとどまる。

T-107 (第76図)

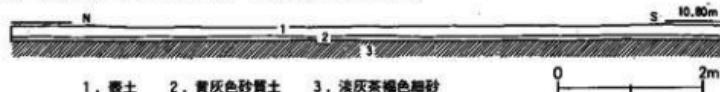
字溝越。 $1.5 \times 10m$ 。T-105・106から道路をはさんで南に隣接する水田である。表土下に黄灰色粘質土、灰黄色粘質土があわせて20cmほどあり、その下は暗灰色粘質土（厚さ約10cm）となる。遺構・遺物はない。最下層は黄灰褐色粗砂である。



第76図 T-107断面図 ( $S = 1/80$ )

T-110 (第77図)

字スカ。T-99からJR吉備線の線路をはさんで北に約50mの位置で、推定城の北辺にあたる。トレンチの規模は $1.5 \times 10m$ である。表土下に黄灰色砂質土が薄くあり、その下は淡灰茶褐色細砂（基盤層）となる。遺構・遺物は認められない。



第77図 T-110断面図 ( $S = 1/80$ )

T-111～113 (第78図)

字高繩手。T-105・106から西へ約200mの位置で、推定八町城の北西隅よりもやや西である。いずれも $1.5 \times 10m$ 。表土下に厚さ10cmほどの暗灰色粘質土があり、その下は黄灰褐色粘質土となり、基盤層である。T-113では、表土下に暗灰色の溝状の凹みが認められたが、遺物はなく時期・性格は不明である。T-111・113で須恵器、土師器の細片が若干出土しているにとどまる。



第78図 T-111断面図 ( $S = 1/80$ )

T-114・115 (第79図)

字土堂。T-111～113から北西に約300m足らずの位置で、今回の調査範囲の西北端にあた

る。この付近からは、かつて道路工事の際に弥生土器などが出土したことが知られている。T-114・115とも $1.5 \times 10\text{m}$ 。表土下に薄く黄色砂質土があり、その下には古墳時代後期と思われる須恵器を出土する厚さ約20cmの包含層、その下に弥生時代後期と考えられる包含層が認められ、それぞれ土器片が少量出土している。



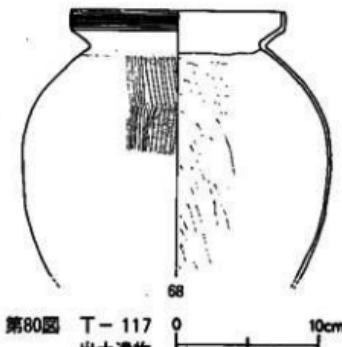
第79図 T-114断面図 ( $S = 1/80$ )

#### T-116・117 (第80図)

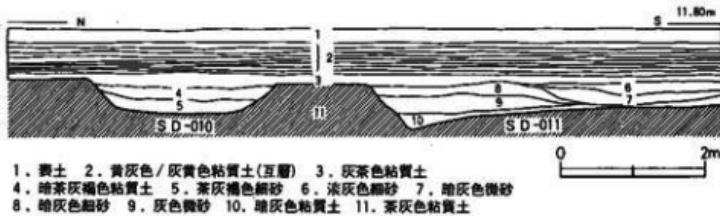
字コフケ。T-114・115から東に約100mの刑部集落の東側に位置する。いずれも $1.5 \times 10\text{m}$ 。かなり削平をうけているようであり、表土直下で基盤層となる。T-116では土塙、T-117では竪穴住居址の一部と考えられる遺構が断面に検出された。T-117では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器(68)が出土している。

#### T-118~120 (第81~84図)

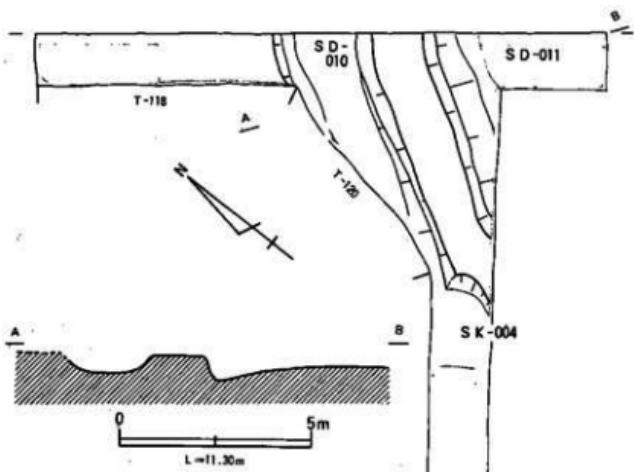
字橋尻。T-114・115の南400mの位置で株木の集落内である。T-118・119は $1.5 \times 15\text{m}$ 、T-120は、T-118・119の間の $13.3\text{m}^2$ である。T-118では表土下に厚さ50cmほどにわたって中世以降の水田層が8層ほどあり、その下に溝状の遺構などを検出した。溝の方向性を確認するため、T-120を設定したが、溝SD-010(第82図)は真北から30~35度東に偏っており、北東から南西に走るようである。溝の東側は高まりとなり、さらにその東は不整な溝状の凹み(SD-011)となる。SD-010は、幅約2m、深さ約40cm



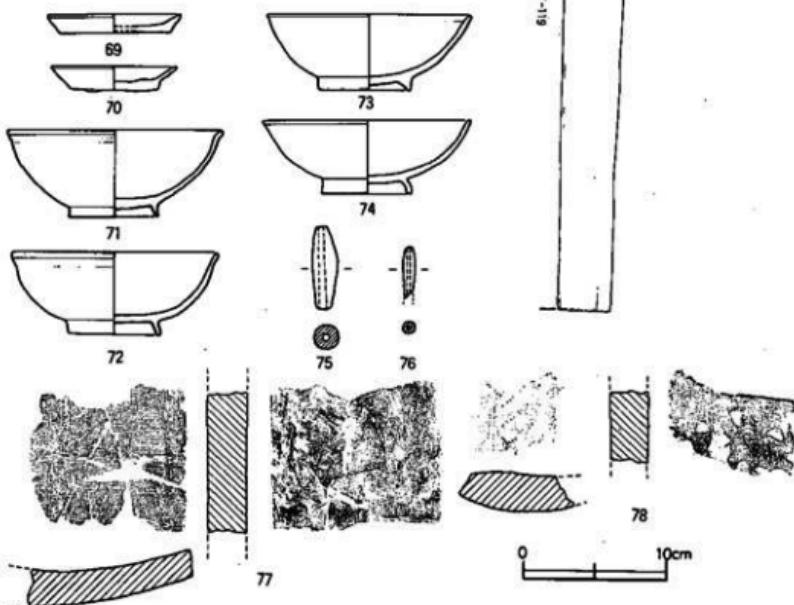
第80図 T-117  
出土遺物



第81図 T-118断面図 ( $S = 1/80$ )

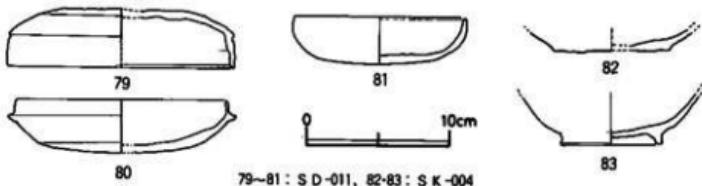


第82図 T-118~120造構配置図 ( $S = 1/150$ )



第83図 T-118・120 SD-010出土遺物

で中世, SD-011は、南側の肩部の立ちあがりが不明であるので幅5m以上の規模と思われ、出土遺物(第84図79~81)から6世紀後半ごろと推定される。溝で挟まれる高まりは、幅1.3mで、



第84図 SD-011・SK-004出土遺物

その性格をうかがわせるような遺構は検出されていない。SD-010の南端部分には、SD-010を切る浅い土塙SK-004がある。出土する遺物（第84図82・83）から、SD-010とほとんど時期差は認められない。

SD-010の出土遺物（第83図）には、早島式土器の小皿と碗、須恵器の破片、土鏡、瓦の破片がある。いずれも13世紀初頭を前後する時期に収まると考えられるものではあるが、溝の方位などからみる限りでは、国府跡に関連する遺構と断定するにはいたらない。

### まとめ

2次調査では、従来の推定地（伝備中国府跡の付近および推定城北西部）、東の窪木から服部駅付近にかけての部分、西の刑部・株木の集落付近で調査を実施した。

まず、伝備中国府跡の所在する字御所の付近（T-83～85）については1次調査のT-44～46の状況とほぼ同様の傾向であり、弥生時代から古墳時代及び中世の遺構・遺物が検出されたが、国府跡に結びつく資料は得られていない。T-83出土の瓦については、柏寺廃寺から西50mほどの位置であるため、柏寺から持ちこまれた可能性を考慮すべきかと思われる。この付近では、削平が著しく、また国道沿いの商業地であるため、調査可能な部分はもはやほとんど残っていない。なお、T-86～89を設定した字南国府西の付近についても削平が著しいようである。

推定域の北西部（T-90～113）は、1次調査地点からさらに北西で、字大溝、溝越、横闘などと称される部分を調査の対象とした。この付近は海拔高で北国府集落付近よりも1～2m高いが、全般的な傾向としては凹地状あるいは湿地状という状況を認めたにすぎない。遺構はトレンチ幅を1～1.5mに設定したこともあり、検出されていない。遺物は、T-96で出土した白磁の破片など出土したもの、古代に属するものは認められない。

窪木から服部駅にかけての部分（T-6～80）では、窪木の集落の近く（T-6～9）、北溝手の集落の北および東側（T-37～45、T-59～80）などで遺物の出土が目立つが、それ以外では微高地の縁辺の凹部というべき状況を認めたにとどまる。弥生時代の遺構・遺物は、T-6～9、T-10～12、T-59～65などで検出されているが、T-6～9、T-59～65では土地の削平が著しい。T-10では弥生時代前期と思われる土器片が出土している。古代に属すと思

われる遺物は、T-37~45、T-66~80などで若干出土しているが、これらについても主体となるのはむしろ中世のようであり、また遺構も明らかでない。また、瓦の破片は、T-57・66・74などで細片ながら出土をみたが、瓦葺の建物の存在を認められるような状況ではない。

刑部から株木にかけての地域（T-114~120）は、総社宮に近接することから調査の対象地とした。T-114~117では、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物などが検出され、早くから安定した微高地となっていたと思われるが、古代の遺構・遺物は認められなかった。T-118~120のOSD-010からは、瓦の破片が出土したが、これは溝の年代や方位などからただちに国府に結びつくとは考えにくい。ただし、この付近ではこれまでに発掘調査の例がなく、瓦の出土も知られていないが、総社宮に近接するという位置を考慮にいれれば、遺構の性格などについて、さらに検討を加える余地はあるといえるだろう。

### 第3節 3次調査の概要

#### (1) 調査の方法と概要

3次調査は、2次調査につづいて、昭和62年度に実施の予定であったが、他の緊急調査と競合し、その対応に急を要したため、1年間実施を延期することになった。

調査の実施に先立って行われた指導員会議では、今回の調査が、当初予定していた3ヵ年計画の最後の年にあたるため、推定域内（伝備中国府跡を東限とする方八町域内）を対象として、国府跡の存否について一応の結論を出すこととし、重要な遺構・遺物が検出されない場合は、ひとまず調査を中断するという方針で臨むことで了承を得た。調査期間は昭和63年11月14日から平成元年1月9日まで、調査面積は875 m<sup>2</sup>である。

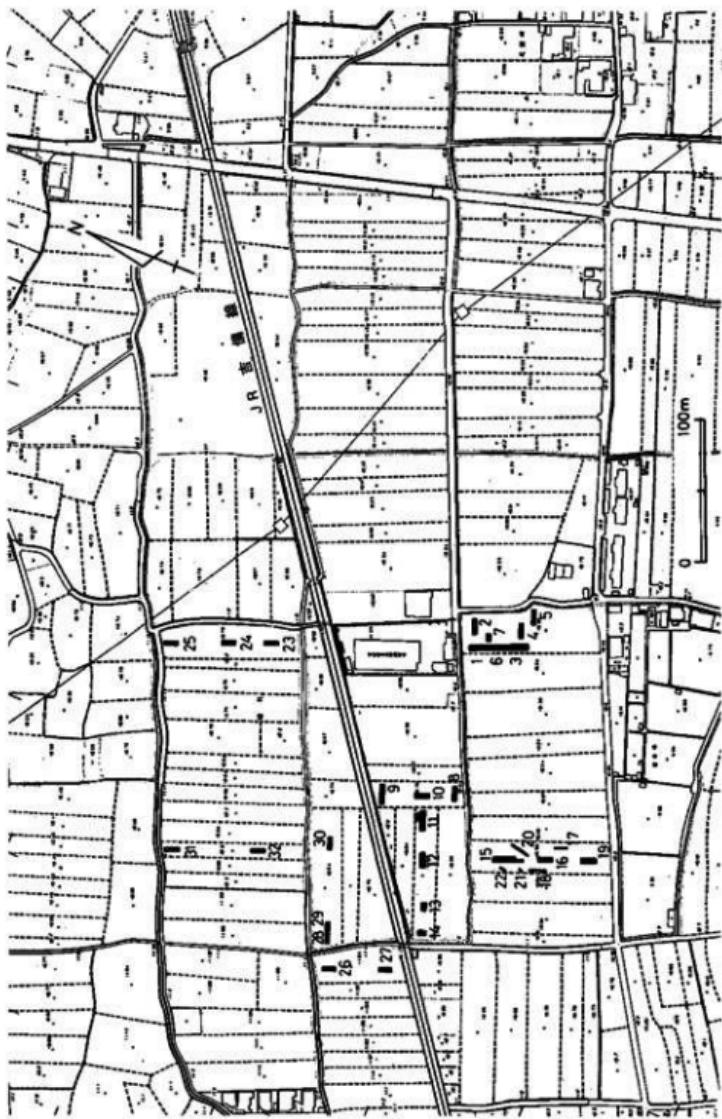
推定域内でのこれまでの調査の経過と今回の調査地の選定、調査の方法について触れておく。

まず、伝備中国府跡付近（字御所）は、土地の削平が広範囲に行われており、これまでに調査を行った2ヵ所の水田が唯一旧地形をとどめていたにすぎず、他は50cmから1mほど田面が下がっている。伝備中国府跡のすぐ南の畑は、高さを見ると旧地形をとどめているようだが、ここにはかつて病院があって、その後再び畑に戻したという事情があり、かなり擾乱をうけているものと思われる。また、伝備中国府跡の境内地は、石碑や立石、祠などがあり、遺構を検出するだけの調査面積を得ることが困難である。以上のことからこの範囲では新たな調査地を求められないという状況である。

国道180号線以南の字南国府西などの部分は、国道沿いであることから商店などが立ち並び水田として残るところは少ない。水田面は、字御所付近に比べ1mほど近く、かなり削平が及ん



第85図 備中國府跡発掘調査地位置図 ( $S = 1 / 15,000$ )



第86図 備中國府跡 3次調査地 トレンチ位置図 ( $S = 1/4,000$ )

でいるようである。また、他の部分と比較して地割線が整然としていないことが指摘できる。

北国府集落付近（字北国府・国府・国府西など）は、1次調査の際に広範囲にトレンチを設定したが、館址の外郭と考えられる溝（SD-007）などの遺構が検出されたものの、古代の遺構・遺物に乏しい点はすでに記した通りである。現在住宅の建っている部分を除き、新たに調査地を求めるのは困難である。

推定域の西側は、県教委調査地の南にあたる字新田・新田後から穴田・河原へと東に向かって蛇行しながら推定域内を貫流する旧河道があり、その南は金井戸・天原の集落である。小規模な工事の立会などの例では、弥生・古墳時代の遺物などが散見されるにすぎない。

推定域西部は、地形的には海拔高で他の部分よりも1mほど高く、安定した遺構面の存在が予想される。2次調査時に、中世の遺物を含む包含層の認められることは確認されていたが、トレンチの幅が1ないし1.5メートルと狭かったため、遺構の存否については不明である。

以上述べてきたような状況から、調査地は推定域北西部に求めることになった。また、調査の方法は、トレンチによるものとし、遺構の検出のため幅を再び3mに戻した。

## (2) 各トレンチの概要

### T-1

学校給食調理場の南で、2次調査のT-103・104を設定した部分の西である。字溝越。3×10m。表土下に厚さ4cmほどの灰黄色粘質土があり、その下の基盤層は灰褐色粘質土である。

基盤層は、上から6cmほどの間で鉄・マンガンなどの黄褐色のブロックを多く含んでいる。基盤層の上面で弥生土器の破片が少量出土した。

### T-2

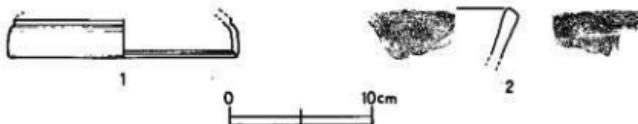
T-1に直交して設定した。3×10m。表土下の灰黄色粘質土は厚さ6cmである。トレンチ東端近くで、ごく浅い溝状のおちこみが認められた。須恵器細片1点と不明の鉄片1が出土したにすぎない。

### T-3 (第87・88図)

3×15m。北から4mほどの位置で溝と思われる傾斜が認められ、須恵器の破片（1）が出土している。他に基盤層の上面から早島式土器の細片などが出土した。



第87図 T-3断面図 (S = 1/80)



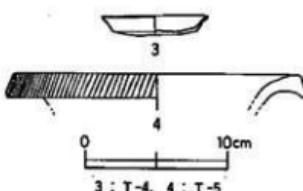
第88図 T-3出土遺物

T-4 (第89・90図)

$3 \times 10m$ 。表土下の灰黄色粘質土は厚さ10~15cm、その下は暗灰色粘質土が5~10cm、基盤層は灰褐色粘質土である。基盤層に掘りこまれた浅い土塙状のくぼみと溝の痕跡と思われるものが検出されたが、遺物ではなく、時期・性格は不明である。灰黄色粘質土中から早島式土器の破片が若干出土した。



第89図 T-4断面図 ( $S = 1/80$ )



第90図 T-4・5出土遺物

T-5 (第90図)

T-3で認められた微高地の傾斜を確認するため設定した。 $3 \times 10m$ 。トレンチの南東隅で、傾斜の肩部がわずかに検出された。弥生土器片、須恵器破片が少量出土した。

T-6

T-1とT-3の間の $3 \times 15m$ である。表土下の灰黄色粘質土が南に向けて徐々に厚さを増してゆく状況を認めたにすぎない。遺構・遺物はない。

T-7

$3 \times 5m$ 。トレンチの北東部の基盤層上面で、鉄・マンガンなどの影響と思われる黄橙色のブロックが直線的に認められた。これはごく薄く堆積したもので遺構ではない。中世の土器片が少量出土した。

T-1~7の範囲では、T-3・4にかけて微高地の縁辺となり、徐々に下降する傾斜を認めたにとどまり、遺構については見るべきものはない。

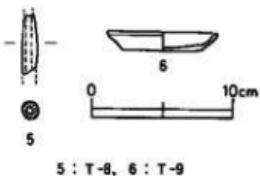
T-8 (第91図)

2次調査で、T-105・106を設定した田の西で、JR吉備線の線路に沿う。字大溝。 $3 \times 10$

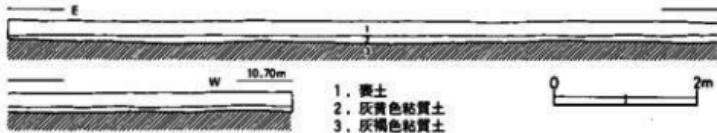
m。表土下にT-1～7と同様の灰黄色粘質土があり、その下は灰黄褐色粘質土の基盤層となる。基盤層は前回調査のT-105・106では、マンガン・鉄などのブロックが多く認められたが、T-8・10では比較的均質で、ブロックを含まない。基盤層上面で検出を行ったが、遺構は認められない。灰黄色粘質土から中世と思われる土器の細片と土縁(5)が出土した。

#### T-9 (第91・92図)

3×14m。表土下の灰黄色粘質土は厚さ6～7cmで、早島式土器(6)や須恵器破片が出土した。基盤層は、黄褐色のブロックが多い。遺構はない。



第91図 T-8・9出土遺物



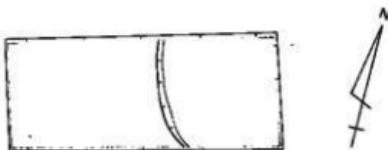
第92図 T-9断面図 (S=1/80)

#### T-10

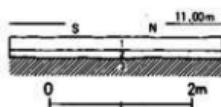
T-8・9の間である。3×10m。灰黄色粘質土は厚さ約8cmである。基盤層上面で検出を行ったが遺構は認められない。弥生土器片・須恵器破片がごく少量出土した。

#### T-11 (第93～96図)

T-10の西の東西に長い田である。3×10mで設定したが、柱穴状と思われる遺構(SK-005)が検出されたため、つながりを検討するため東に3m延長し、さらに北側に2×4.7mの拡張区を設定した。SK-005は、上面径約1m、深さ50cmの規



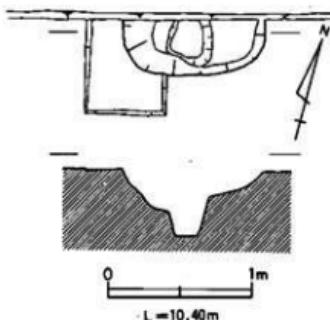
第93図 T-11遺構配置図 (S=1/100)



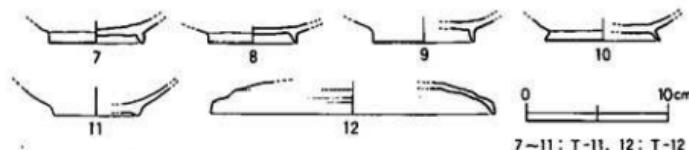
1. 表土  
2. 灰黄色粘質土  
3. 灰褐色粘質土

第94図 T-11断面図 ( $S = 1/80$ )

横で、確認した範囲では単独のものである。北側の拡張区には、浅い土壌状のおちこみが認められた。表土下の灰黄色粘質土から早島式土器の破片や亀山焼破片が出土している。



第95図 T-11 SK-005平・断面図  
( $S = 1/40$ )



第96図 T-11・12出土遺物

#### T-12 (第96図)

$3 \times 10\text{m}$ 。表土下の灰黄色粘質土 (約 6 cm) の下に暗灰色粘質土 (6 cm) があり、その下が基盤層となる。造構はない。須恵器破片 (12)・早島式土器片が出土している。

#### T-13

$3 \times 5\text{m}$ 。T-12と同様の層序であるが、暗灰色粘質土は 8 cm 以上である。造構はない。近世と思われる土器片少量が出土した。

#### T-14

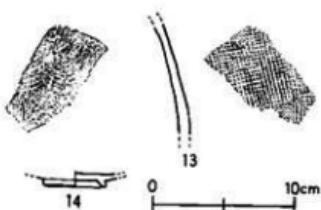
$3 \times 5\text{m}$ 。層序は T-12・13 と同様で、暗灰色粘質土は 15 cm ほどである。基盤層上面で検出を行ったが、造構・遺物は認められない。

T-8～14の範囲では、SK-005を除き造構はなく、遺物も僅少である。

#### T-15 (第97・98・100図)

T-1～7から西約 150 m の位置で、推定域の西端に近い。字溝越。 $3 \times 10\text{m}$  で設定したが、北端から 8 m ほどのところから幅 7～8 m の溝 (SD-012) が検出されたため、南に 10 m ほど延長した。溝からは須恵器細片が出土している。表土下の黄灰色砂質土などから早島式土器の破

片(14)・亀山焼の破片(13)が出土した。



第98図 T-15出土遺物

T-16(第97・104・105図)

3×10m。トレンチ南半部にはほぼ南東から北西に向かってのびる溝(SD-013)を検出した。幅50~70cm、深さ10~25cmである。遺物はなく、時期は不明である。基盤層は淡茶色粘質土であるが、溝の南から徐々に灰色粗砂へと変化する。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・青磁などがあるが、いずれも細片で構造に伴わない。

T-17(第97図)

T-16で検出された溝SD-013のつながりを確認するため設定した。1×9.3m。表土下15~20cmほどで灰褐色粘質土の基盤層を認めたにとどまる。早島式土器の破片1点が出土している。

T-18(第97・106図)

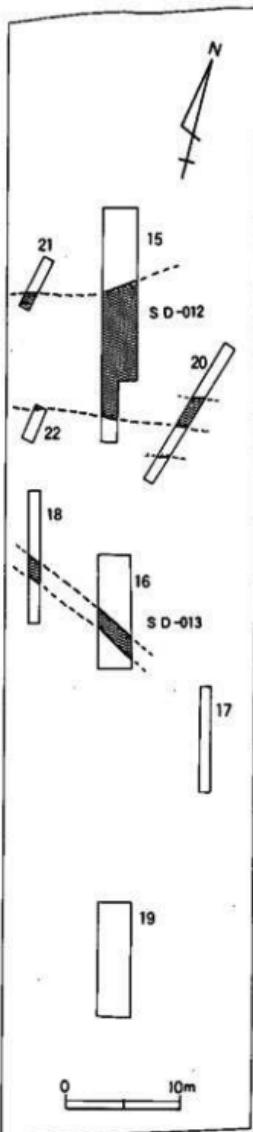
T-17と同様SD-013のつながりを確認するため設定した。1×11.5m。南端から約4mほどのところで溝の肩を検出した。断面で見ると幅1.5m、深さ40cmぐらいと思われる。遺物はない。

T-19(第97・99・107図)

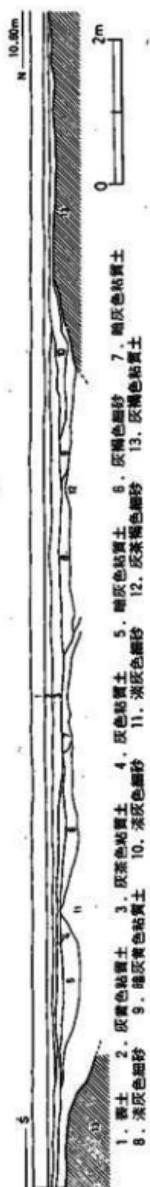
調査範囲の南端である。3×10m。表土30~40cmで安定した基盤層となる。トレンチの中間で断面に浅いくぼみを認めたが、平面的には明確でない。



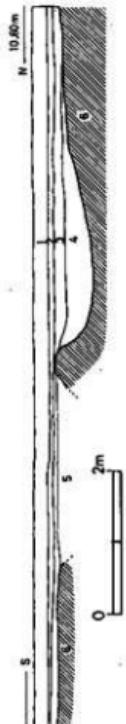
第99図 T-19出土遺物



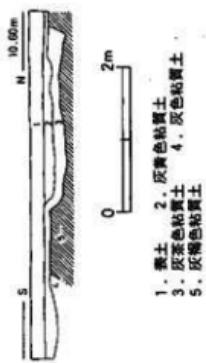
第97図 T-15~22位置図  
(S=1/500)



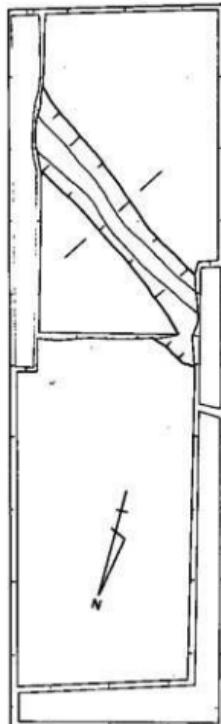
第100图 T-15断面图 (S = 1 / 80)



第101图 T-20断面图 (S = 1 / 80)



第102图 T-21断面图 (S = 1 / 80)



第103图 T-22断面图 (S = 1 / 80)



1. 表土 2. 灰黄色粘質土 3. 灰茶色粘質土  
4. 暗灰茶色粘質土 5. 灰褐色粘質土

第105図 T-16断面図 ( $S = 1/80$ )



1. 表土 2. 灰黄色粘質土 3. 灰茶色粘質土  
4. 暗灰色粘質土 5. 淡灰色細砂 6. 暗灰色粘質土  
7. 暗灰茶色粘質土 8. 灰褐色粘質土

第106図 T-18断面図 ( $S = 1/80$ )



1. 表土 2. 灰黄色粘質土 3. 灰色細砂  
4. 黄灰色細砂 5. 灰褐色粘質土

第107図 T-19断面図 ( $S = 1/80$ )

出土遺物は土鍤(15)の他に須恵器・早島式土器の細片がある。

#### T-20 (第97・101図)

$1 \times 13.7\text{m}$ 。T-15で検出された溝(SD-012)のつながりを確認するために設定した。北から5mほどのところから幅約2.5m、深さ50cmの溝が検出され、これはSD-012につながる可能性を想定できる。その南には暗灰色粘質土の堆積した溝が錯綜しているようであるが埋土はSD-012とは異っている。弥生土器・須恵器・早島式土器の細片が出土しているが図示できるものはない。

#### T-21 (第97・102図)

トレンチの規模は $1 \times 3\text{ m}$ で、北端近くで溝の肩を検出した。SD-012につながる可能性がある。

#### T-22 (第97・103図)

$1 \times 4.8\text{m}$ 。北半に幅2.5m、深さ30cmほどの土塙状と思われるおちこみを検出した。また、南端で溝の肩を検出したが、これは深さ20cmぐらいまでしか掘り下げていない。遺物はない。

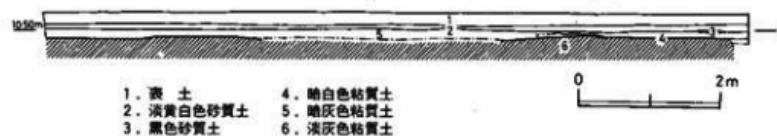
T-15~22の範囲は、T-19で基盤層が低くなっていることから、微高地の縁辺に近い位置と考えられる。

T-23・24・25 (第108~114図)

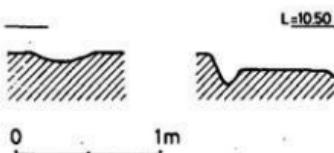
学校給食共同調理場北、JR吉備線の線路を越えた位置に設定した  $3 \times 10\text{m}$  のトレンチである。字堀前。層序は、基本的に表土、淡黄白色砂質土、暗灰色粘質土、淡灰色粘質土の基盤層となる。遺構検出は、暗灰色粘質土を除去し基盤層上面で行った。

T-23では、ほぼ中央で浅い溝状遺構とトレンチ南端で方形土塙を検出した。方形土塙は、当初住居址の可能性が考えられたが、床面が南に向かって傾斜していることや、遺物が出土しなかったことから住居址と断定はできなかった。遺物は、淡黄白色砂質土から主に出土し、古墳時代から中世にかけての土器片であった。下層の淡灰色粘質土からは、少量の弥生時代後期土器(27)、須恵器(26)が出土した。

T-24では、中央部で東西方向の幅1.1mの溝を検出した。溝の時期は、出土した土器片(30)



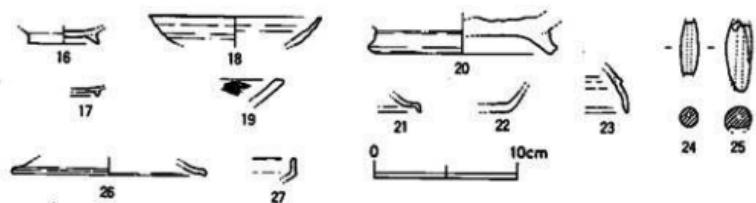
第108図 T-23平・断面図 ( $S = 1/80$ )



第109図 T-23遺構断面図 ( $S = 1/40$ )

から弥生時代後期と考えられる。

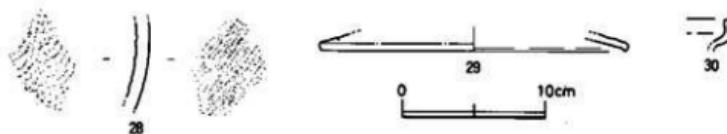
T-25では、トレンチ北端近くで、暗灰色粘質土の浅い溝状の凹部が認められた。暗灰色粘質土からは、古墳時代から平安時代にかけての須恵器・土師器(46~50)が出土した。



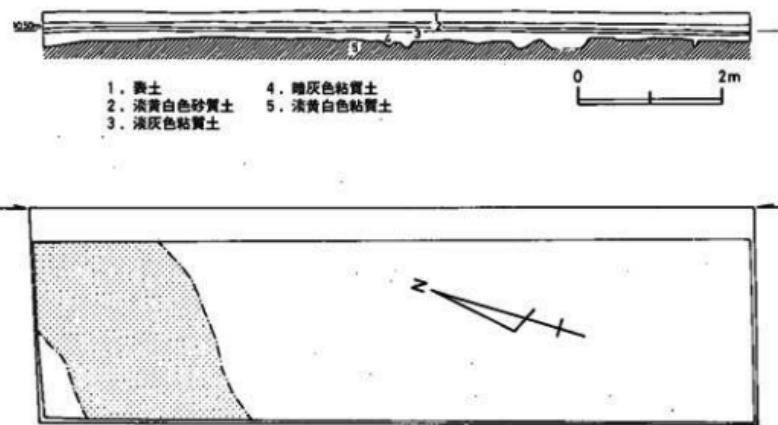
第110図 T-23出土遺物



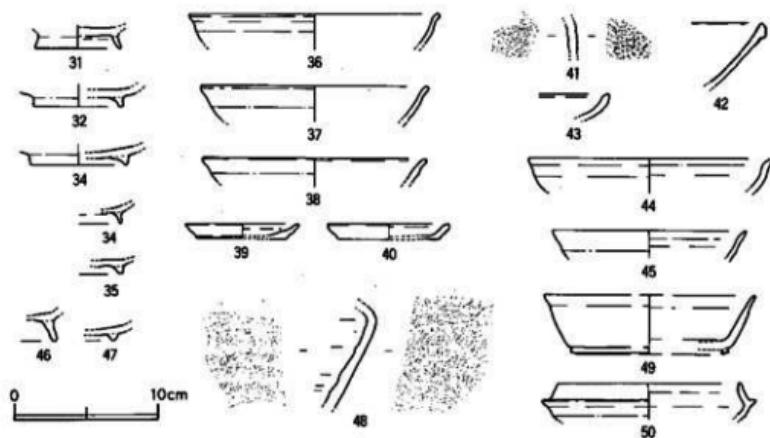
第111図 T-24平・断面図 ( $S = 1/80$ )



第112図 T-24出土遺物



第113図 T-25平・断面図 ( $S = 1/80$ )



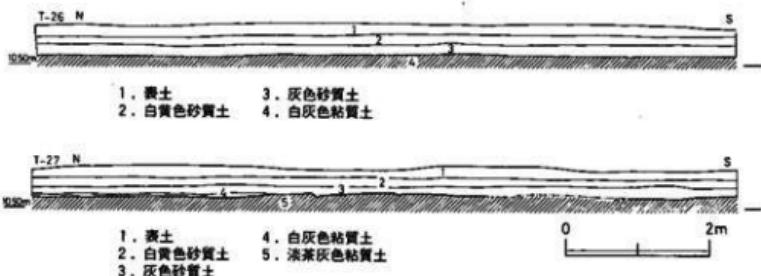
第114図 T-25出土遺物

T-26・27 (第115・116図)

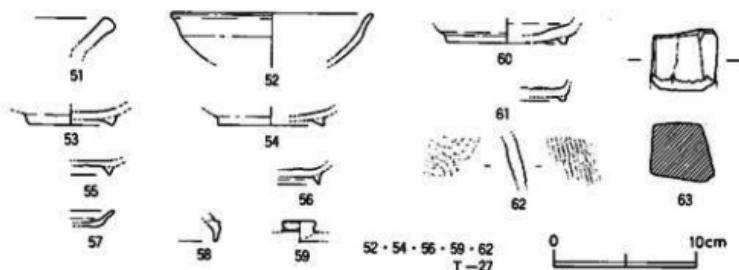
T-23～25から南西約240m、推定八町城西端近くに設定した $3 \times 10$ mのトレンチである。字植松。表土下は、白黄色砂質土、灰色砂質土、白灰色粘質土、淡茶灰色粘質土となる。T-26

では、白灰色粘質土は認められない。基盤層の淡茶灰色粘質土の上面では、鉄分の凝集が認められる。遺構は、検出できなかった。

遺物は、両トレンチの白黄色砂質土から古墳時代から近世までの土器片が出土した。下層の灰色砂質土からは、古墳・奈良時代土器（60・61・62）と砥石が出土した。



第115図 T-26・27断面図 (S = 1/80)

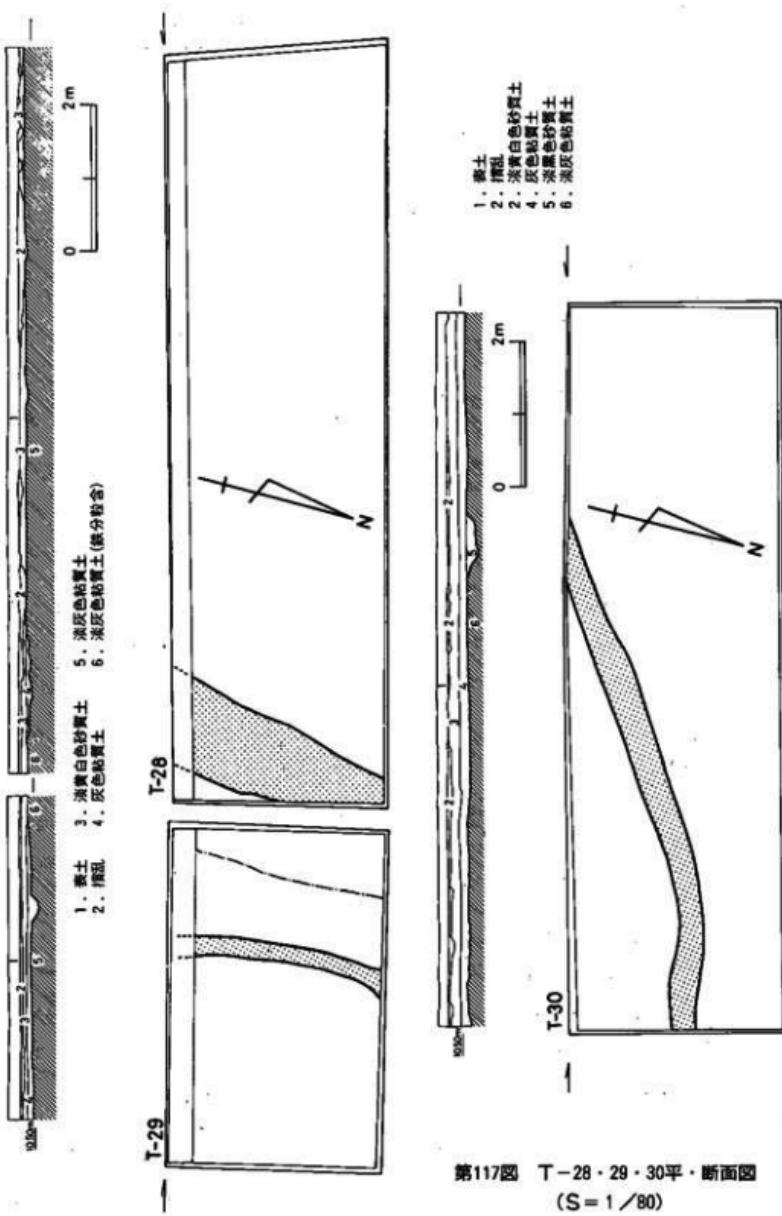


第116図 T-26・27出土遺物

T-28・29・30 (第117・118図)

T-26・27の東、推定八町城西端に設定した3×10mのトレンチである。字大溝。表土下は、表土・淡黄白色砂質土を含む擾乱層があり、淡黄白色砂質土となり、T-29・30では、灰色粘質土が認められ基盤層の淡灰色粘質土となる。

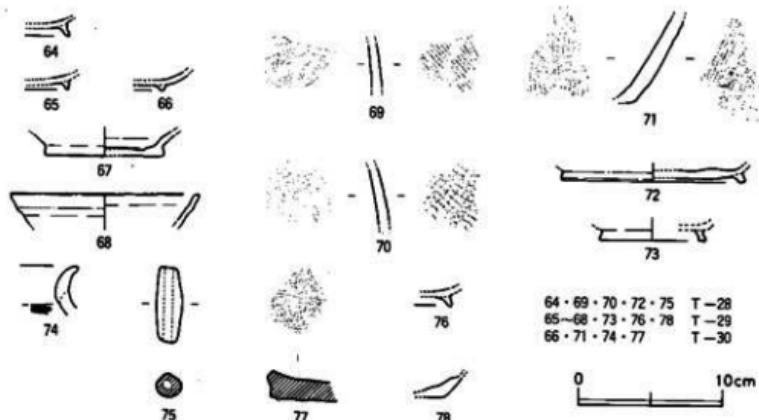
T-28は、国府域を画する西溝を検出する目的で設定した。トレンチの東端近くで南北方向の浅い溝状遺構を検出したため、隣接して東にT-29を設定した。T-29では、幅30cm、深さ16cmの溝を検出した。この両溝の間は、鉄分粒が多数認められた。この部分は断面観察の結果、湧水のため深掘りはできなかったが、版築で築かれた高まりではなく畦状の高まりであると思



第117図 T-28・29・30平・断面図  
(S = 1 / 80)

われた。この畦状の高まりから東に向かって基盤層が傾斜し、灰色粘質土が堆積している。T-30では、南西から北東方向の溝を検出した。溝は、幅40cm、深さ17cmを測る。

遺物は、淡黄白色粘質土から奈良時代から中世にかけての土器片が出土し、下層の灰色粘質土からは、土師質高台付椀(76)、瓦(77)、弥生土器(78)が出土した。



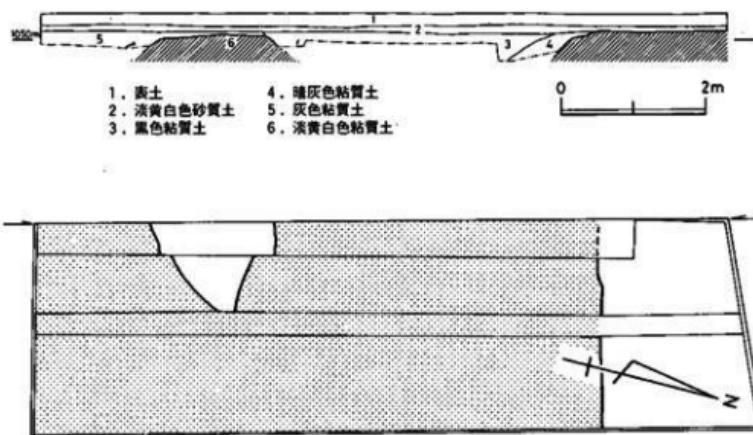
第118図 T-28・29・30出土遺物

T-31・32(第119~121図)

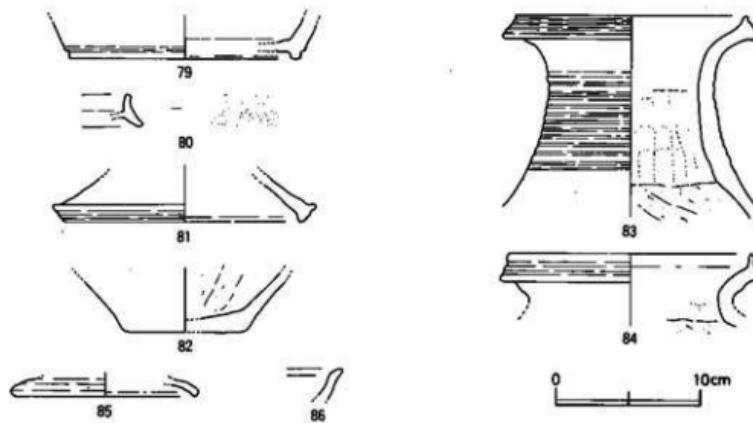
T-28~30の北、推定八町城北端に位置する南北に細長い水田に設定した3×10mのトレンチである。字堀前。T-31は、国府の北を画する溝を探る目的で設定した。トレンチ北端では、表土下は淡黄白色砂質土、淡黄白色粘質土の基盤層となる。しかし、中央から南は淡黄白色砂質土下に弥生時代の包含層があり、多数の土器片が出土した。断面観察では、2本の溝が認められた。北溝からは(84)、南溝からは(83)が出土したため、両溝共に弥生時代後期の溝と考えられる。T-32は、T-31と同様の状況を想定したが、このトレンチの基盤層である灰色粘質土がT-32の基盤層に比べ20cmほど低い。T-31からT-32の間で南向きの自然傾斜があると思われる。出土した遺物も少量であった。(85)は淡黄白色砂質土から、(86)は暗灰色粘質



第119図 T-32断面図(S=1/80)



第120図 T-31平・断面図 ( $S = 1/80$ )



第121図 T-31・32出土遺物



第122図 推定域内の地形想定図 ( $S = 1/15,000$ )

土から出土した。

以上が3次調査の概要である。調査面積は900m<sup>2</sup>足らずで、1次、2次調査よりも減少したが、これはトレントの幅を3mとして面的な遺構検出を重視したためであり、遺物の出土量は、2次調査時を上回った。

遺物では、T-23・25～30などで国府の存続していたと思われる奈良・平安時代の土器を若干出土していることが注意されるが、いずれも包含層からの出土であり、これを伴う遺構については明らかにできなかった。

遺構は、河道の可能性のある幅の広い溝（SD-012）をはじめとして、溝やそれに類するものが多い。T-11で検出されたSK-005は、柱穴状と思われたが、単独のようであり時期は不明である。溝は、時期がさまざま、T-24で検出されたものは弥生時代後期のものであるし、全般的に特に明確な規格性は認められず、国府に関連する施設とは認めがたい。

これまでの調査成果から、今回調査を実施した推定域北西部の一帯は、さらに北西に位置する現在の刑部集落から北東にのびる微高地の縁辺部にあたり、弥生時代以降、人々の活動の痕跡はわずかに認められるものの、現在にいたるまで生活の中心とはならなかったようである。

#### 第4節 むすびにかえて

「備中国府在賀夜郡」と『和名抄』に記された字句を手掛かりに、昭和60年度より始められた備中国府跡緊急確認調査は、平成元年1月をもって具体的な成果をあげられぬまま、通算3カ年におよぶ発掘調査を終えたことは先に報告したとおりである。以下に反省と展望を行ってむすびとしたい。

備中国府跡が何処に所在したかについては、具体的な遺構・遺物の出土がないため、歴史地理的分野から、主として国府名を冠する小字名を中心に推考が行われ、市内金井戸周辺が最有力地とされてきた。従って調査もそうした経緯をふまえ、二年次に若干周辺地域へ拡大したもの、基本的にはこのような方向で対応することとなった。しかし調査結果は、国府ないし関連遺構はいくに及ばず、他の時期の遺構さえも当初予測したより希薄な状況であった。一部に削平による消失という考え方もあるものの、遺構の底部まで消失してしまうほどの削平があったとは考えられない状況であることまた事実である。総社平野の中心部地域は旧河道が複雑に入りくみ、ある面ではきわめて不安定な土地状況であった様相をうかがわせている。そこで調査終了にあたって、総社平野内の状況について再考してみたい。

高梁川は、市内湛井あたりで幾条もの分流を生みだしているが、基本的には二つの河道が注目される。一つは、井尻野～真壁～三須～赤浜にいたるもので、風土記逸文にいう「宮瀬川」

に比定されるものである。以南が庵屋郡、以北が賀夜郡となるいわゆる境の河道である。この地域を振りに「真壁・三須」地域とよぶことにしよう。この地域は、高梁川左岸域周辺では数条もの南北方向の、また宮瀬川の南にもそれに平行する一条の河道がみられる。南は200~300m級の主峰列から北へ幾条もの低丘陵が派生し、また三須丘陵、三須独立丘陵、三輪山山塊が点在していて、扇状地とその周辺部に湿地状部を形成している。主要遺跡として宮山墳墓群、作山古墳、備中國分僧・尼寺跡があり、その南には古代山陽道が走り、東西への交通の要衝となっている。一方、井尻尾で分岐したもう一つの河道は、浅尾~福井~西山を経て服部付近で宮瀬川と合する。ふさわしい名称とはいえないが、便宜的にこの河道を振りに「西山川」としておこう。この西山川と宮瀬川に囲まれる地域は、総社平野の中心部にあたり、地域内をさらに複雑に幾条もの新旧の河道が走る。この地域を「総社」地域と呼称しよう。賀夜郡の中核部を形成すると考えられる地であり、これまで先学により備中國府跡に比定された地域である。肥沃な沖積地であるが、反面洪水の危機に晒されることの多い地域でもある。のちに「総社」が合祀されたのもこの地であり、以後総社宮の門前町として発展した地である。また西山川と以北の丘陵地および足守川に画される地域は、砂川・血吸川の小河川が南流し、広大な扇状地を形成している。西山丘陵の存在により、河川氾濫の危険性はなく、その意味では安定した地域といえよう。この地域を「北溝手・阿曾」地域と称しよう。この地域は、従来「総社」地域に比べやゝ奥まった感があり、国府比定にあってはあまり省みられない地域であったといえよう。しかし、白鳳期創建の稻寺庵寺はこの地に包括され、背後の険阻の山並には古代山城の鬼ノ城、山岳仏教の聖地新山・岩屋の諸寺も所在し、麓下にはいつの時代まで遡れるか不明だが鉄物師の里阿曾も知られる。

さて次にこれら三地域の条里制造構についてみよう。広狭の差こそあれ、三地域とも明確に条里制を残している。しかし南北の基線は、「北溝手・阿曾」で北28度西、「総社」で北22度西、「真壁・三須」で北16度西とそれぞれ異なる。しかもこれらの界域を画しているのは、「宮瀬川」「西山川」であり、両河道の存在はこの時期において大きな意味を持つものと解される。換言すれば、条里制施行期にあってこの両河道は、郡境を、あるいは郡内においては郷域を画した可能性も考えられて良いのではないか。

ここで再度、この「北溝手・阿曾」地域を考え直してみたい。交通の要路として古代山陽道の重要性はいうまでもないが、それはいわば京への、また西国へのルートであり、北の出雲へいたるルートは、吉備の津から足守川沿いに北上し、砂川を経て黒尾の谷筋から藪田へ通ずる路は、総社宮の門前町が拓ける以前のルートとして存在したところである。この点を考慮すれば「北溝手・阿曾」地域は必ずしも交通の要衝からはずれたとすることとはならず、また先にみた古代山城鬼ノ城、阿曾の鉄物の里などを考慮すれば、この地域は再考してしかるべき地域で

はないかと思われる。

しかしこのことは、備中国府の所在地について「総社」地域を否定するものではなく、視点を変えてみることを意味するにすぎない。

備中国府の所在確認については、歴史地理学的方法に依拠しつつも、遺物の散布状況などの地道な考古学的手法を基礎に進めなければならないことを再確認した調査でもあったことを付記しておわりとしたい。

## 註

1. 拓影は、馬場昌一氏の手を煩わした。
2. 「特別展 吉備の古代瓦」《図録》岡山市立オリエント美術館 1980 に写真が掲載されている。
3. 萩原克人「古代吉備豪族の誕生」『歴史手帳』第4巻第6号 1976年
4. 明治37年岡山県刊。
5. 永山卯三郎「備中国府ノ位置ニ就テ」『岡山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第七冊 同調査会 1974年復刊
6. 藤井 駿「備中の国衙について」『国史論集』1 京都大学文学部読史会 1959年
7. 米倉二郎「國府と条里」『史学研究』57号 1954年
8. 藤岡謙二郎「播磨と美作・備前・備中の三國府」『國府』 日本歴史叢書25 吉川弘文館 1969年
9. 萩原克人「備中国府」『岡山県大百科事典』 山陽新聞社 1980年
10. 岡本寛久「総社市金戸備中國府跡の確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会 1980年
11. 中山薰「備前・備中國府付近の古代地名」『地理』27-7 古今書院 1982年
12. 木下良「國府付属寺院について一角田博士の「國府寺」説を承けてー」『古代学論叢』 1983年
13. 小川信「中世の備中國衙と惣社造営」『国学院雑誌』第八十九卷十一号 1988年
14. 村上幸雄「真壁遺跡、古代～中世」『総社市史』考古資料編 総社市 1987年
15. 木下 良「國府の立地と形態」『國府』歴史新書44 教育社 1988年
16. 総社市井尻野字溝井の高梁川に設けられた溝井堰から取水し、総社市・岡山市・倉敷市・都窪郡山手村・同清音村を灌漑する西日本有数の農業用水。伝承によれば平安時代末期の武将妹尾兼康が所領の妹尾郡に水を引くため寿永年間(1182~1185)に堰を改修、水路を整備したといわれる。藤井駿・加原耕作『備中溝井十二箇郷用水史』 溝井十二箇郷用水組合 1976年
17. 早島式土器の年代観については、鈴木康之「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡1』 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988年 に従った。

表1 遺物観察表

## 1. 1次調査

(単位 cm)

番号	器種	法 量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
1	碗	20	—	—	施釉	灰白色	緻密	堅 硬	白磁
2	高台付鉢	—	7	—	ナデ、貼付高台	淡黃白色	緻砂	良	土師質
3	盃	4.5	—	—	ナデ	暗茶褐色	“	堅 硬	燒成燒
4	杯 盆	—	—	—	ナデ	青灰色	“	“	須恵器
5	高 杯	—	11.8	—	調整不詳	淡黃白色	緻砂	良	弥生、外國燒
6	甕	—	5.6	—	“	灰白色	“	“	弥生、須恵
7	高台付碗	—	6.3	—	ナデ、貼付高台	乳白色	緻砂	“	土師質
8	“	—	5.0	—	“、 “	“	“	“	“
9	“	—	6.4	—	調整不詳、貼付高台	淡紫白色	“	“	“
10	“	—	6.2	—	“、 “	淡黃白色	緻砂	“	“
11	壺	—	—	—	長方形格子目タタキ	青白色	“	“	須恵質
12	罐 舟	—	—	—	内シタメ、外ハケメ	青白色	緻砂	“	土師質
13	土 瓶	30.2	—	—	内口縁ヨコナデ	暗茶色	粗砂	“	“
14	甕	—	—	—	格子目タタキ	青灰色	緻砂	“	須恵質
15	罐舟?	—	—	—	クシメ	淡白茶色	“	“	土師質
16	杯 身	—	6.8	—	ヨコナデ	暗青灰色	緻密	堅 硬	須恵器
17	甕	12	—	—	口縁端部外面に1条の凹線	素白色	緻砂	良	弥生
18	瓶	—	6.7	—	施 釉	灰白色	緻密	堅 硬	白 磁
19	“	—	—	—	施釉、外口縁下輪垂下	“	“	“	“
20	小 瓶	8.5	6.4	1.1	内外ナデ	白灰色	緻砂	良	土師質
21	“	8.2	5.9	1.5	“	白色	“	“	“
22	甕	—	—	—	外面格子目タタキ	黒 色	“	“	“
23	“	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心円文	暗青灰色	“	“	須恵器
24	甕	—	—	—	外面ハケメ、内面同心円文	青灰色	緻砂	“	“
25	平 瓦	—	—	—	凸面右目、凸面綱目	淡黃白色	緻砂	“	“
26	羽 垂	—	—	—	外ヨコハケメ	淡黃褐色	“	“	瓦 質
27	土 瓶	—	—	—	内ヨコハケメ	暗茶色	“	“	“
28	高台付碗	—	6.0	—	ナデ、貼付高台	白 色	緻砂	“	土師質
29	小 瓶	8.8	6.6	1.4	ナデ	“	“	“	“
30	“	8.2	6.3	1.6	底部ヘラ切りか	“	“	“	“
31	瓶	—	—	—	施 釉	白灰色	緻密	堅 硬	白 磁
32	“	—	—	—	“	オリーブ色	“	“	青 磁
33	高台付杯	—	9.2	—	ナデ	淡黃白色	緻砂	良	須恵器
34	高 杯	—	13.2	—	“	青灰色	“	“	“
35	土 瓶	—	—	—	内面ヨコハケメ	淡黑茶色	緻砂	“	土師質
36	甕	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心円文	青灰色	緻砂	“	須恵器
37	瓶	—	—	—	施 釉	白 色	緻密	堅 硬	白 磁
38	杯?	—	—	—	ナデ	青灰色	緻砂	良	須恵器
39	燈明器	9.8	4.2	1.4	ナデ、ヘラ削り	赤褐色	緻砂	“	燒成燒
40	“	9.0	4.6	1.4	“、 “	“	“	“	“
41	“	10.4	—	—	“、 “	青灰色	“	“	“
42	甕	—	7.4	—	磁器、塗付	白 色	緻密	堅 硬	伊万里?
43	瓶	—	3.2	—	“、施 釉	淡綠色	“	“	細声?

番号	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	粘土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
44	内耳皿	—	—	—	ナデ	淡茶灰色	細砂	良	土師質、外面にスヌ
45	碗	8.0	3.2	4.8	織部、輪付	白色	緻密	堅焼	伊万里?
46	“	—	5.4	—	施胎	茶褐色	細砂	良	唐津?
47	燈明皿	9.0	4.0	1.3	ナデ、ヘラ削り	茶褐色	”	”	SX001
48	碗	—	—	—	施胎	茶褐色	”	”	—
49	碟	—	—	—	石製	白色	—	—	SX001
50	高台付碗	—	6.0	—	ナデ、貼付高台	白色	細砂	良	SD005、土師質
51	“	—	5.3	—	” “ ”	”	”	”	”
52	杯	—	—	—	ナデ	青灰色	細砂	”	須恵器
53	小皿	—	—	1.2	調整不詳	淡黃白色	細砂	”	土師質
54	甕	—	—	—	口縁端部外面に3の凹線	白色	”	”	弥生
55	小皿	9.8	6.8	2.3	ナデ	淡赤灰色	細砂	”	SX003、土師質
56	“	9.7	6.9	2.3	”	”	”	”	”
57	“	9.8	6.0	2.0	”	淡白茶色	”	”	”
58	“	9.5	5.9	2.1	”	”	”	”	”
59	“	9.6	5.9	2.1	”	”	”	”	”
60	“	9.6	5.8	2.2	”	”	”	”	”
61	“	9.7	5.4	2.1	”	”	”	”	”
62	“	9.7	6.3	2.2	”	”	”	”	”
63	“	9.7	6.0	2.2	”	”	”	”	”
64	碗	13.2	6.0	4.1	施胎、高台底部織胎	灰綠色	”	堅焼	SD005、重ね焼
65	香炉	13.8	—	5.2	”、3足	淡綠色	”	”	—
66	燈明皿	11.4	6.0	1.9	糸切り	黒褐色	”	”	備前焼
67	甕	—	—	—	ナデ	青灰色	”	”	”
68	杯	—	12.7	—	”	”	”	良	SD007、須恵器
69	杯	—	—	—	”	淡青灰色	”	”	須恵器
70	甕	—	—	—	くびれ部に爪形剥目凸唇、口縁端部外面に3条の凹線 外面平行タキ、内面同心円文	白色	細砂	”	SD008、弥生
71	“	—	—	—	”	淡青白色	細砂	”	須恵器
72	平瓦	—	—	—	凹窓市目	青灰色	細砂	”	—
73	碗	—	6.1	—	ナデ、貼付高台	淡茶白色	細砂	”	土師質
74	甕	—	—	—	口縁端部外面に3条の凹線	黃白色	細砂	”	弥生
75	瓦	—	—	—	凹窓市目	淡黄色	細砂	”	—
76	甕	—	—	—	外面平行タキ後ハケメ、内面同心円文	淡青灰色	”	”	須恵器
77	甕	—	—	—	外面に3条の凹線	青灰色	”	”	備前焼
78	土器	最大長5.0cm 最大径1.6cm	—	—	—	黑色	—	—	—
79	“	4.1	1.3	—	—	赤色	—	—	—
80	燈明皿	—	—	—	ナデ、ヘラ削り	黑色	細砂	堅焼	備前焼
81	碗	—	—	—	”、貼付高台	白色	”	良	土師質
82	“	—	5.2	—	” “ ”	乳白色	”	”	”
83	“	—	5.6	—	” “ ”	”	”	”	”
84	“	—	6.0	—	” “ ”	”	”	”	”
85	“	—	5.8	—	” “ ”	”	”	”	”
86	小皿	9.5	7.6	1.0	—	”	”	”	”
87	甕	—	—	—	外縁格子目タキ	淡青灰色	”	”	須恵質
88	碗	—	4.2	—	糸切り	青灰色	”	”	—
89	甕	—	—	—	ナデ	黃白色	細砂	”	弥生

番号	器種	法 盆			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口 径	底 高	器 高					
90	土瓶?	-	-	-	ナデ	暗茶褐色	細 砂	良	
91	三足鉢	-	-	-	内外面ハケメ	黒 色	微 砂	"	外面スス付凸
92	碗	-	-	-	ナデ	乳白色	"	"	土師質
93	壺	-	-	-	外面平行タクチ 内面同心円文鉢スリ消し	暗青灰色	"	"	須恵器
94	"	-	-	-	ナデ	暗青灰色	"	"	微削挽?
95	小 瓶	-	-	-	"	赤褐色	"	"	微削挽
96	碗	-	5.8	-	"、貼付高台	黄白色	"	"	土師質
97	"	-	7.4	-	"、"	白 色	"	"	
98	"	14.5	6.0	6.0	"、"	"	"	"	
99	"	-	5.8	-	"、"	黄白色	"	"	
100	"	-	7.0	-	"、"	白灰色	"	"	
101	"	14.3	6.0	4.8	"、"、ハケメ	淡黃白色	"	"	
102	小 瓶	8.0	6.5	1.2	"、ヘラ切り	白 色	"	"	
103	杯?	-	-	-	"、貼付高台	淡青灰色	"	"	須恵器
104	高 杯	14.1	-	-	調整不詳	淡黃白色	細 砂	"	土師器
105	壺	17.0	-	-	体部内面ヘラ削り	黄白色	"	"	
106	壺	14.0	-	-	ナデ、頸部外にハケメ	淡茶白色	微 砂	"	赤 生
107	高 杯	-	-	-	ナデ	淡青紫色	"	"	
108	石高丁	最大長9.9cm	最大幅4.5cm	最大厚0.7cm					打 制 サヌカイト
109	小 瓶	-	-	-	ナデ、ヘラ削り、糸切り	赤褐色	微 砂	良	微削挽
110	壺	11.0	-	-	調整不詳	青灰色	"	"	"、自然釉
111	"	14.4	-	-	ナデ	"	"	"	須恵質
112	碗	14.8	6.0	4.9	"、貼付高台	乳白色	"	"	土師質
113	"	-	-	-	"	白 色	"	"	
114	"	14.8	-	-	"	"	"	"	
115	"	14.0	-	-	"	"	"	"	
116	"	-	7.0	-	"、貼付高台	淡黃白色	"	"	
117	瓶	12.8	-	-	調整不詳	白 色	細 砂	"	
118	杯	11.6	7.7	2.6	調整不詳	赤褐色	"	"	土師器
119	碗	-	7.3	-	"、貼付高台	乳白色	微 砂	"	
120	杯	9.7	6.5	2.4	ナデ、底部削り	淡青灰色	"	"	須恵器
121	壺?	-	-	-		淡赤黄色	細 砂	"	土師器
122	高 杯	-	-	-	ナデ	淡青白色	微 砂	"	須恵器
123	高杯?	-	-	-	"	青灰色	"	"	
124	杯 壺	-	-	-	"	"	"	"	
125	壺	-	-	-	外面平行タクチ裏ナデ 内面同心円文	"	"	"	
126	"	-	-	-	"	暗青灰色	"	"	
127	杯 身	9.6	-	3.5	ナデ、ヘラ削り	青灰色	"	"	
128	"	8.4	-	-	ナデ	灰白色	"	"	
129	"	-	-	-	"	"	"	"	
130	"	14.8	-	-	"	暗青灰色	"	"	
131	杯 壺	11.8	-	-	"	灰白色	"	"	
132	"	13.2	-	-	"	青灰色	"	"	
133	"	15.4	-	-	"	"	"	"	
134	"	17.4	-	-	"	灰黄色	"	"	
135	"	13.6	-	-	"	青灰色	"	"	"、自然釉

番号	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	粘土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
136	壺	-	-	-	内面へラ削り	赤褐色	粗砂	良	土師器
137	-	14.8	-	-	ナデ	"	"	"	"
138	高杯	15.8	-	-	調整不詳	淡赤褐色	"	"	"
139	-	-	-	-	外腹指頭オサエ	淡赤黄色	"	"	"
140	-	11.6	-	-	ナデ、ハケメ	淡赤白色	"	"	劣生
141	壺	-	-	-	調整不詳	白色	"	"	"
142	-	-	-	-	"	"	"	"	"
143	-	-	-	-	ナデ、口縁端部外面に2条の凹線	白灰色	"	"	"
144	-	18	-	-	ナデ	淡赤黄色	"	"	"
145	-	-	+	-	"、口縁端部外面に3条の凹線	"	"	"	"
146	-	-	-	-	"	粗砂	"	"	"
147	鉢?	-	-	-	"、内面へラ削り	暗茶色	粗砂	"	"
148	壺?	-	-	-	"、口縁端部外面に5条の凹線	黄褐色	"	"	"
149	壺	22.8	-	-	凹線	口縁端部外面に4条の凹線	"	"	"
150	瓶	-	6.4	-	施物	灰白色	最密	堅密	白堊
151	壺	21.8	-	-	ナデ	暗青灰色	粗砂	良	燒前焼?
152	瓶	-	5.7	-	ナデ、點付高台	白色	"	"	土師質
153	-	-	7.0	-	"、"	"	"	"	"
154	-	-	6.8	-	"、"	粗砂	中や甘	"	"
155	-	13.8	-	-	"、"	淡黃褐色	粗砂	良	"
156	小皿	8.8	6.7	1.1	"	"	"	"	やや甘
157	瓶	15.5	-	-	"	綠色	"	良	綠釉
158	高杯	-	-	-	ナデ	青灰色	粗砂	"	須恵器
159	杯	蓋	-	-	"	青白色	粗砂	"	"
160	皿?	-	-	-	調整不詳	白色	"	"	土師質
161	瓦	-	-	-	凹面布目、凸面輪目	白色	粗砂	"	"
162	瓶?	-	-	-	調整不詳	淡黃褐色	"	"	土師質
163	壺	25.3	-	-	ナデ	"	"	"	"
164	杯	24.4	-	-	"	灰白色	"	"	須恵器
165	-	22.1	-	-	"	白灰色	粗砂	"	"
166	壺	14.8	-	-	"	淡茶褐色	粗砂	"	土師器
167	高杯	-	8.6	-	"	淡青白色	粗砂	"	須恵器
168	杯	身	-	-	"	淡青灰色	粗砂	"	"
169	-	8.6	-	-	"	青灰色	"	"	"
170	-	11.8	-	-	"	淡青灰色	"	"	"
171	-	14.2	-	-	"	青灰色	"	"	"
172	-	-	-	-	"	暗青灰色	粗砂	"	"
173	杯	蓋	13.8	-	"	青灰色	"	"	"
174	-	-	-	-	"	"	"	"	"
175	土瓶	最大長4.8cm 最大径0.8cm	-	-	-	墨色	-	-	-
176	-	5.1	1.8	-	-	"	-	-	-
177	-	4.0	1.3	-	-	"	-	-	-
178	-	2.9	1.2	-	-	"	-	-	-
179	-	5.4	2.2	-	-	"	-	-	-
180	-	(4.3)	1.8	-	-	"	-	-	-
181	-	(4.7)	2.0	-	-	"	-	-	-
182	壺	-	-	-	ナデ、口縁端部外面に3条の凹線	黃褐色	粗砂	良	劣生
183	壺	19.0	-	-	"、頸部外面に5条の凹線	淡黃白色	"	"	"

## 2. 2次調査

番号	器種	柱量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
1	平瓦	—	—	—	凸面両目	黄灰色	細砂	良	稻寺施寺?
2	"	—	—	—	凹面両目	灰褐色	"	"	"
3	高杯	18.6	—	—	ナデ	赤褐色	緻密	"	弥生
4	壺	18.0	—	—	"	"	"	"	"
5	網脚	長16	—	—		黄茶褐色	細砂	"	土師質
6	壺	—	7.0	—		黄灰色	緻密	"	"
7	壺	—	12.0	—		灰褐色	"	"	須恵器長5cmの破片
8	壺	—	—	—		"	細砂	"	"
9	高杯	—	10.0	9		淡灰褐色	"	"	底面汚が強
10	土錐	最大長4.2	最大径1.3			淡茶褐色	"	"	完形
11	"	4.8	1.1			淡黃褐色	"	"	"
12.	壺	14.0	—	—	口縁、頸部、凹線	淡黃灰色			弥生
13	石底丁	残存長5.0	幅3.0						打製サカナイト
14	器台(底)	約27	—	—	側面に凹線	淡赤褐色	砂粒多い	良	長さ9cmの破片 弥生
15	"	約35	—	—	端面に列点文	黄褐色	"	"	長さ10cm破片 弥生
16	高杯	約20	—	—		淡赤褐色	砂粒少ない	"	長さ5cmの破片
17	杯	15.2	12.3	4.7	丁寧なナデ	灰色	緻密	"	長さ4cmの破片須恵器
18	壺?	—	14.8	—		"	"	"	長さ5cmの破片須恵器
19	壺?	つまみ縁2.8	—	—		淡青灰色	"	"	つまみの残存須恵器
20	壺?	—	10.4	—		"	"	"	長さ3cmほどの破片須恵器
21	"?	—	9.4	—		淡灰色	細砂	"	長さ4cmほどの破片須恵器
22	"?	—	10.5	—		淡灰青色	"	"	底面汚などの破片須恵器
23	"?	—	11.4	—	器面磨滅	黄灰褐色	"	"	土師器
24	杯?	—	—	—		灰色	細砂	"	長さ3cmの破片須恵器
25	壺	—	5.4	—		黄褐色	細砂	"	長さ5cm破片土師器
26	壺?	—	13.2	—	ナデ	淡青色	細砂	堅	須恵器
27	杯	—	11.4	—	"	灰色	"	やや軟	長さ4cmの破片須恵器
28	"	—	8.5	—		淡灰褐色	細砂	軟	須恵器
29	"	—	10.4	—	ナデ	灰色	砂粒少ない	良	須恵器長さ5cmの破片
30	土錐	最大長3.6	最大径1.2	—	手づくね	茶褐色			欠損あり
31	"	6.0	1.9	—	"	淡青灰色	細砂	良	完形
32	"	5.0	1.1	—	"	茶褐色			
33	瓦	—	—	—		青灰色			
34	石斧	残存長13.0	幅5.8		頭部に敲打痕	灰色			磨製刃部欠損
35	小皿	8.7	5.2	1.5		淡灰色	緻密	良	完形
36	"	9.2	5.9	1.5		"	細砂	"	"
37	"	9.0	6.7	1.7		暗灰褐色	"	"	"
38	"	9.0	5.3	1.2		淡黄色	緻密	"	
39	壺	14.0	8.2	2.7	ナデ、口縁すこし肥厚	淡灰色	細砂	"	口縁の火
40	"	14.0	9.2	3.2	"	淡青灰色	"	"	口縁をすこししく
41	"	14.6	8.8	3.1	ナデ	黄褐色	細砂	"	"
42	"	14.0	8.0	3.1	"	淡茶色	緻密	"	
43	壺	9.1	4.3	3.3	"、小型	黄褐色	細砂	"	完形
44	"	14.0	8.0	5.1	"、縁端薄い、 口縁端すこしまるい	淡黄褐色	"	"	

番号	器種	法 量			形態・手法の特徴	色調	粘土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
45	碗	15.0	6.5	5.5	口縁すこし肥厚	淡青灰色	粗砂	良	完形
46	"	15.3	6.3	5.2	" "	黄褐色	"	"	
47	"	13.6	6.5	5.0	" "	淡青褐色	粗砂	"	
48	"	14.6	6.0	4.7	" "	淡青灰色	"	"	
49	"	15.0	5.9	5.4	口縁すこし肥厚	淡黄褐色	"	"	ほぼ完形
50	"	15.2	6.0	5.4	口縁すこし肥厚	淡灰黄色	"	"	"
51	碗	14.3	5.9	5.5		淡青灰色	こまかい		"
52	"	14.4	5.8	5.2		淡黄色	"	硬	
53	"	14.6	6.0	5.6		淡黄褐色	"	良	ほぼ完形
54	"	14.7	6.6	5.8		淡青灰色	"	"	
55	"	14.6	7.0	5.0		"	"	"	
56	平瓦	-	-	-	凹面布目、凸面開目	灰色	砂粒含	堅	織
57	壺	16.0	-	-	頸下端はシャープ	淡灰色	緻密	良	須恵器
58	杯	11.6	-	4.3	被はシャープである	暗灰青色	"	"	"
59	皿	15.0	9.2	2.9	ナデ	淡茶褐色	"	堅	土師質
60	小皿	9.0	5.2	1.7		淡青灰色	"	良	"
61	碗	-	6.0	-		暗茶褐色	"	"	"
62	小皿	8.0	6.0	1.2		淡茶色	"	"	"
63	"	8.9	5.9	1.1		淡灰黄色	"	堅	"
64	皿	12.0	9.4	1.6		"	"	良	"
65	"	16.0	8.9	(2.9)		淡茶色	"	"	"
66	壺	10.5	-	11.5	丸底器面剥落	淡赤褐色	粗砂	"	完形、土師器
67	碗	-	7.2	-		灰色	"	"	底面2/5残、白帯
68	壺	14.8	-	(模18.5)		茶灰色	粗砂	"	秀生～古式土師
69	小皿	9.2	7.8	1.3	ナデ	黄灰色	"	"	土師質
70	"	9.0	6.0	1.5	"	淡黄褐色	こまかい	"	"
71	碗	14.8	6.0	6.1	口縁端を屈曲	淡青灰色	砂粒多い	"	"
72	"	14.3	6.2	5.8	" "	淡黄褐色	砂粒含	"	"
73	"	14.1	5.8	5.3	"	"	"	"	
74	"	14.2	6.0	5.1	"	淡灰黄色	"	"	"
75	土瓶	最大径5.9	最大径1.8		手づくね	灰色	砂粒多い	"	完形
76	"	4.5	0.9		"	茶褐色	砂粒含	"	
77	平瓦	-	-	-	凹面布目	淡黄色	もろい	軟	二次的な熟皮？
78	"	-	-	-		灰色	"	良	
79	蓋	16.0	-	4.0	天井部へラ削り、凹線	淡灰青色	緻密		須恵器
80	杯	14.8	最大径16	3.7	底部へラ削り、ナデ	淡灰色	"	"	"
81	"	12	-	3.3	ナデ	茶褐色	粗砂	"	土師器
82	皿	-	5	-	"	淡茶褐色	"	"	土師質
83	碗	-	7	-	"	淡黄色	緻密	"	"

## 3. 3次調査

番号	器種	法 盆			形態・手法の特徴	色 調	粘 土	模 塗	備 考
		口 径	底 頂	高 度					
1	杯 蓋	16	-	-	芒鉢	灰色	粗 砂	堅 機	須恵器
2	鉢?	-	-	-	ナデ	淡灰青色	"	良	"
3	小 蓋	7.2	-	1.3	"	淡黄色	"	"	土師質
4	壺	20	-	-	輪面施文	"	"	"	弥 生
5	土 鉢	最大長4.0	最大径1.1	-	両端尖く	淡茶色	"	"	土師質
6	小 蓋	7.3	-	1.3	ナデ	"	"	"	"
7	碗	-	6.2	-	"	淡黄灰色	"	"	"
8	"	-	6.0	-	"	"	"	"	"
9	"	-	7.0	-	"	淡茶色	"	"	"
10	"?	-	8.0	-	"	淡黃灰色	"	"	"
11	瓶?	-	5.8	-	"	淡黄色	"	"	"
12	杯?	-	20	-	"	淡灰青色	"	"	須恵器
13	甕	-	-	-	外面施子タタキ 内面同心円文後スリ消し	淡灰色	"	良	龜山燒
14	碗	-	4.0	-	ナデ	暗茶灰色	"	"	土師質
15	土 鉢	最大長5.2	最大径2.1	-	"	灰褐色	粗砂多い	"	"
16	碗	-	4.8	-	貼付高台	淡灰褐色	粗 砂	"	"
17	"	-	4.8?	-	"	淡黃白色	"	"	"
18	"	12.0	-	-	ナデ	淡灰褐色	"	"	"
19	瓶	-	-	-	内面ハケ目	淡褐色	"	"	"
20	甕	-	12.3	-	ナデ、貼付高台	灰白色	粗 砂	"	須恵器
21	杯	-	-	-	内外共にナデ	"	"	"	"
22	"	-	-	-	"	"	"	"	"
23	杯 蓋	-	-	-	"	淡青灰色	粗 砂	"	"
24	土 鉢	最大長3.6	最大径1.3	-	"	淡褐色	"	"	上下端欠
25	"	4.8	1.8	-	"	淡黃灰色	"	"	區 欠
26	杯蓋?	13.4	-	-	内外ナデ	淡青灰色	粗 砂	"	須恵器
27	甕	-	-	-	口縁端部外面クシ描き沈線	淡灰灰色	粗 砂	"	弥 生
28	"	-	-	-	外縁平行タタキ 内面同心円文	淡青灰色	"	"	須恵器
29	杯 蓋	21.2	-	-	内面ナデ	灰白色	粗 砂	堅 機	"
30	甕	-	-	-	磨 縮	淡灰褐色	粗 砂	良	弥 生
31	碗	-	6.0	-	貼付高台	淡灰白色	粗 砂	"	土師質
32	"	-	6.2	-	"	"	"	"	"
33	"	-	6.6	-	"	淡茶白色	粗 砂	"	"
34	"	-	-	-	"	灰褐色	粗 砂	"	"
35	"	-	-	-	"	灰白色	"	"	"
36	"	17.6	-	-	"	白 色	"	"	"
37	"	16.0	-	-	"	褐色	粗 砂	"	"
38	"	15.8	-	-	"	淡白褐色	粗 砂	"	"
39	小 蓋	8.0	6.4	1.1	"	灰白色	粗 砂	"	"
40	"	8.6	7.2	1.1	ナデ	檀灰白色	粗 砂	"	"
41	甕	-	-	-	外面格子目タタキ、内面ハケ目	青灰色	"	"	須恵器
42	碗	-	-	-	内外面に物	淡白灰色	粗 砂	堅 機	白 磁
43	杯?	-	-	-	"	淡褐色	粗 砂	"	須恵器?
44	杯	17.0	-	-	内外ナデ	淡青灰色	粗 砂	"	須恵器
45	"	13.6	-	-	"	"	粗 砂	"	"

番号	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	治土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
46	碗	-	-	-	貼付高台	淡赤白色	細砂	良	土師質
47	-	-	-	-	"	淡褐色	"	"	"
48	盞	-	-	-	外面平行タタキ、内面同心円文強ナデ	淡青灰色	微砂	"	須恵器
49	杯身	14.8	11.0	4.2	貼付高台	"	"	"	"
50	"	12.6	-	-	ナデ	青灰色	"	堅	鐵
51	瓶	-	-	-	ナデ	淡灰褐色	"	良	土師質
52	碗	14.2	-	-	"	素灰色	"	"	"
53	"	-	5.6	-	貼付高台	淡灰白色	"	"	"
54	"	-	7.4	-	"	淡黃白色	"	"	"
55	"	-	-	-	"	淡灰白色	"	"	"
56	"	-	-	-	"	"	"	"	"
57	小皿	-	-	-	磨減	淡褐色	"	"	"
58	高杯	-	-	-	ナデ	青灰色	粗砂	堅	須恵器
59	杯蓋	-	-	-	"	"	"	"	"
60	杯身	-	8.4	-	貼付高台	淡灰白色	細砂	中や良	?
61	"	-	-	-	"	淡青灰色	微砂	良	"
62	盞	-	-	-	外面平行タタキ、内面同心円文	墨灰色	"	"	"
63	鏡石								
64	碗	-	-	-	貼付高台	淡褐色	微砂	良	土師質
65	"	-	-	-	"	白灰色	"	"	"
66	"	-	-	-	"	淡赤白色	"	"	"
67	杯	-	8.2	-	ナデ	淡茶褐色	細砂	"	"
68	碗	13.0	-	-	"	"	"	"	"
69	盞	-	-	-	外面平行タタキ、内面同心円文後スリ消し	青灰色	微砂	"	須恵質
70	"	-	-	-	外面格子目タタキ	黑色	細砂	"	龜山燒
71	碟	-	-	-	外面ハケ目、内面クシメ	淡茶白色	"	"	土師質
72	杯身	-	12.8	-	貼付高台	灰白色	微砂	"	須恵器
73	"	-	7.4	-	"	淡青灰色	"	"	"
74	盞	-	-	-	ハケメ	淡赤褐色	粗砂	"	土師質
75	土瓶	最大径1.5	-	-	"	灰白色	微砂	"	"
76	碗	-	-	-	貼付高台	淡褐色	細砂	"	土師質
77	瓦	-	-	-	凹面布目	淡黃白色	"	"	"
78	盞?	-	-	-	"	淡茶褐色	"	"	齊生
79	盞	-	16	-	ナデ	淡青灰色	粗砂	堅	須恵器
80	高杯	-	-	-	"	淡茶褐色	細砂	良	齊生
81	"	-	16	-	"	灰白色	微砂	"	"
82	盞	-	8.4	-	内面ケズリ	淡褐色	細砂	"	"
83	盞	16.0	-	-	ナデ	"	"	"	"
84	"	16.4	-	-	"	"	"	"	"
85	杯蓋	12.4	-	-	"	青灰色	微砂	"	須恵器
86	杯身	-	-	-	"	灰白色	細砂	"	"

図版 1



備中国府跡比定地周辺航空写真

図版 2



1. 推定城遠景（北国府地区、東から）

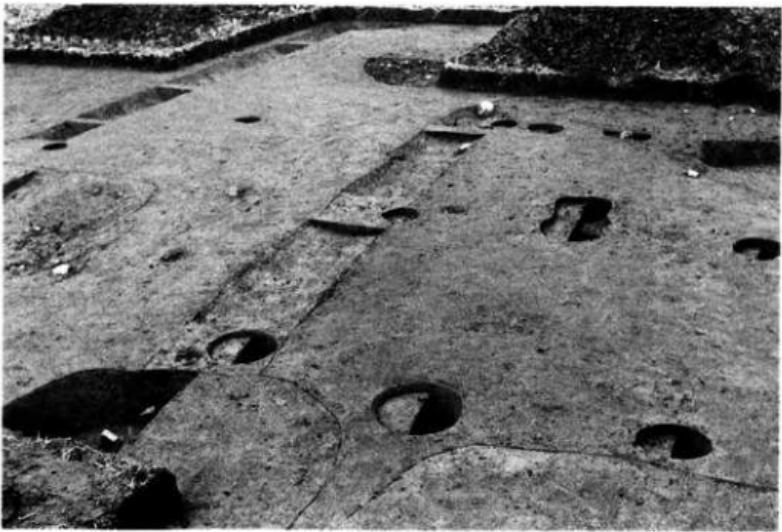


2. 伝備中國府跡近景

図版 3



1. 1次調査 T-15土層断面



2. 1次調査 T-12造構掘り上がり状況

図版4



1. 1次調査T-26及び蔽土手



2. 1次調査T-26溝断面



1. 1次調査 T-23溝断面



2. SK-002遺物出土状況

図版 6



1. 1次調査 T-25土層断面



2. 1次調査 T-45構造掘り上がり状況



1. 2次調査T-83~85遺構掘り上がり状況



2. SK-003遺物出土状況

図版 8



1. SD-010・011 (東から)



2. SD-010・011 (西から)

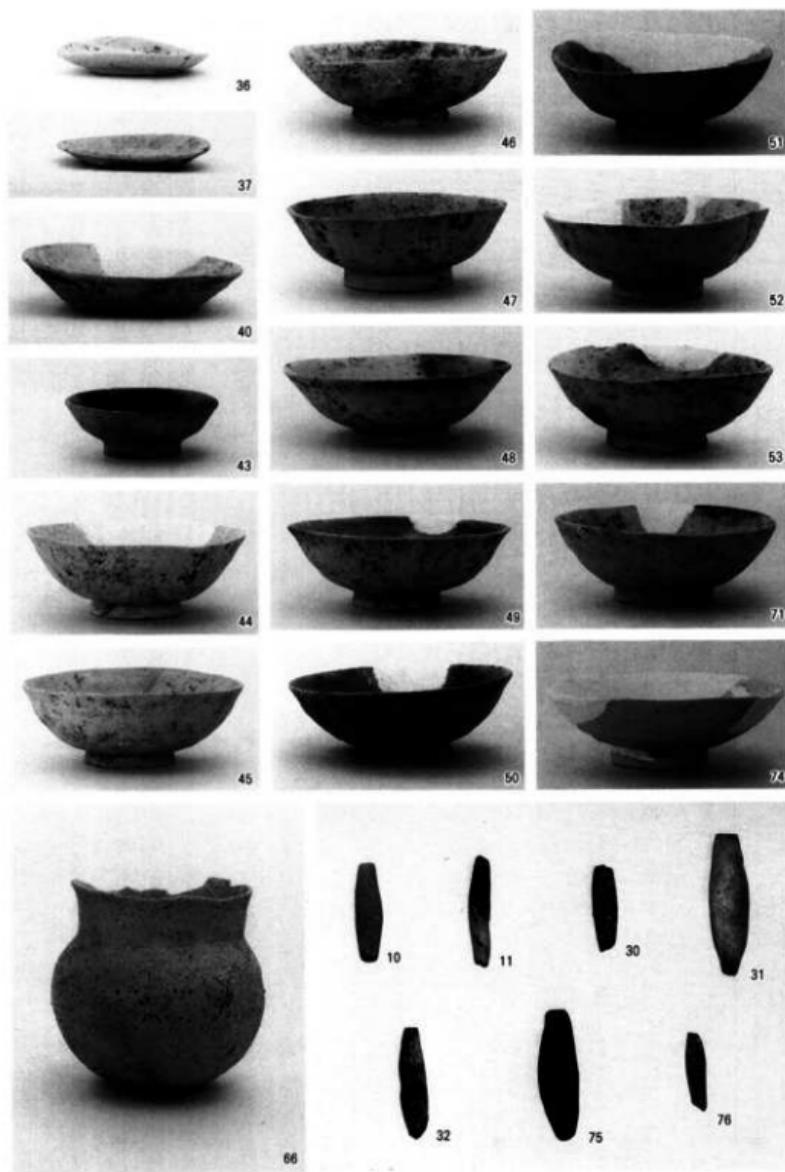


1. SD-010遺物出土状況



2. SD-011土層断面

図版10



2次調査出土遺物



1. 3次調査SK-005掘り上がり状況



2. SD-013掘り上がり状況

図版12



1. 3次調査T-28・29遺構検出状況



2. 3次調査T-30遺構検出状況

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 7

備 中 国 府 跡  
緊急確認調査

1989年3月 印刷

1989年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会  
総社市中央一丁目1番1号

印 刷 柳本印刷株式会社  
総社市総社一丁目10番24号

